

2002年 山口大学就職戦線

—就職氷河期を生き抜く—

「元気で存在感のある 県づくり」に向けて ～新しい時代に求められる人材～



伊藤 通雄
山口県人事課長

1 きらら博の成果を21世紀の県づくりに

「いのち燐めく未来へ」をテーマとして、「元気」をキーワードに開催されました「山口きらら博」は、県民の一丸となった取組みにより大成功のうちに閉幕しました。

山口県の元気や魅力、未来への可能性を全国にアピールするとともに、新たな交流の礎を築くことができ、21世紀の新しい県づくりの実現に向けて、大きな一歩を踏み出すことができたものと考えています。

特に、このきらら博を通じて、県民一人ひとりが様々な分野で力を発揮し、それが大きなエネルギーとして結集し、成功体験を共有できたことは、私たち山口県民にとって大きな誇りや自信となりましたし、これから県づくりを進める上で大きな原動力になるものと思います。

そして、この博覧会を一過性のイベントに終わらせることなく、この博覧会で創られた数多くの資産をこれから地域づくりや県づくり、さらには人づくりに継承・発展させていくことが重要だと思います。

2 地方分権の進展と地域間競争の激化

新しい世紀を迎えた今日、長引く景気の低迷や少子・高齢化の進行、地球規模での環境問題への対応、さらには急速に進むIT革命など、私たちを取り巻く社会経済情勢は大きな変化と困難に直面しています。

また、「地方分権一括法」の施行など、本格的な地方分権が進展し、地域同士が知恵やアイデアを競い合う時代となっており、今後、様々な分野で本当の地方分権のあり方が試され、結果として優勝劣敗をもたらす激しい地域間競争の時代に突入してまいります。

一面では、たいへん厳しい時代に直面しているわけですが、私たちは、むしろこうした変化や困難を大きなチャンスと捉え、知恵と活力を結集し、勇気を持って立ち向かい、時代の潮流を乗り越えて、新しい県づくりを確かなものにしていかなければなりません。

3 新しい時代に求められる人材

こうした中で、人材の確保や養成が、これまで以上にたいへん重要なっています。

分権の時代にあって、県民のニーズや政策課題に積極的に対応し、

「元気で存在感のある県づくり」を進めていくためには、その担い手となる多彩で意欲的な人材の確保が不可欠ですし、若い職員の感性やアイデア、エネルギーは大いに期待されているのです。

では、「県職員としてどういう人材が求められているのか」ということですが、やはり、公務員として、県民の奉仕者であるという社会的使命感、倫理感を持っていることが基礎になると思います。そして、変化の時代にあって臆することなく、先見性や創造性に富み、情熱とバイタリティ溢れる行動力で新しい県づくりに積極果敢にチャレンジしていく意概を持った人材が求められています。

山本寛斎さんは、「やまぐち元気伝説」の中で、「人間が夢に向かって進むとき、大きなエネルギーが生まれる」と語っていらっしゃいます。

県民一人ひとりが燐めき、元気で魅力溢れる山口県を実現していくために、自分の力を存分に發揮したい、そうした夢と情熱に溢れる元気な若者が、21世紀の県政の一翼を担われることを期待しています。

山口県が求める教師像



貞末 俊裕
山口県教育庁教職員課長

山口県は、21世紀の初頭の社会を展望し、本県の歴史や伝統、県民の教育に対する期待やニーズを踏まえて『夢と知恵を育む教育の推進』を本県教育の基本目標として掲げ、児童生徒一人一人の個性や特性を最大限に伸長するとともに、豊かな人間性や、社会性を育てる教育を推進しています。

こうした教育を実現するためには、変化の激しい社会に柔軟に対応し、地球的視野に立って行動できる資質能力を持った教員が求められることから、教員採用に当たっては、使命感、教育的愛情、実践的指導力を持ち、様々な課題に適切に対応できる力量のある人材の確保がきわめて重要であると考えています。

こうしたことから、県教育委員会としては、次のように、求める教師像を設定し、教員採用候補者選考試験の実施要項に明記しています。

- ・心身ともに健康で、豊かな人間性と人権感覚を持っていること
- ・児童・生徒に対する深い教育的愛情を持っていること
- ・教育者としての強い使命感を持っていること
- ・豊かな教養と専門的知識を持っていること
- ・柔軟な社会性や幅広い社会常識を持っていること

県教委としましては、これらを踏まえて、人物重視の観点から、採用試験の改善に努め、優秀な人材の確保につとめてきました。

1次試験では、教員としての基礎的な能力を見るための筆記試験や体育などの実技試験に加えて、豊かな人物を見るための個人面接を実施しています。

さらに、2次試験では、2回目の個人面接に加えて、集団討議やグループワークによる集団面接を実施し、様々な観点から人物を評価するようつとめるとともに、情報社会に対応した資質をみるためにパソコン実技を実施しています。

また、教員に採用後には、教員としての資質能力の一層の向上を図る観点から、大学院や教育研修所、民間企業等における研修や海外研修などの現職研修の充実にも努めているところです。

山口県は、防長教育と称される優れた教育的風土を有し、明治維新の原動力となった多くの先人を輩出してきました。『若者に期待し、若さに託してきた』本県教育を未来に引き継ぐためにも、教職の道を志す皆さんの若い感性と意欲に溢れたバイタリティに期待したいと思います。



新しい時代の 主役は皆さんです



大賀 亨
株式会社山口銀行
五日市支店 支店長
経済学部 昭和56年卒

金融機関を志望する学生さんへ

1. 変化はチャンス

日本経済が病んでいます。日本企業がもがいています。そして再生のために改革が一斉に断行され始めています。当然、聖域などあろうはずがありません。金融機関を取り巻く環境も同様で、従来の延長線上の発想では対応できない新しい時代が到来しつつあります。こうした変革期に、まさに社会に飛びださんとする学生さんに、是非忘れないでいただきたいことは、「変化の時こそがチャンスである。」ということです。今こそ、若い皆さんの柔軟な発想と行動が求められています。自分自身の経験を踏まえて、金融機関を志望する学生さんに4点ほどメッセージを贈ります。自省をこめて述べておりますが、これから的人生の参考になれば幸甚です。

2. 社会人として

第1に、高い目標に向かって、積極的にチャレンジする社会人に、なって欲しいと思います。今後は少數精銳で、一人ひとりが大変難しい仕事に直面することが予想されま

す。真正面から積極果敢に取り組み、問題を解決するというチャレンジ精神が必要です。常に高い目標を掲げ、その目標に向かって、ファイティングスピリットを前面に出して、積極的に取り組む気概が必要です。

第2に、常に明るく、人間性豊かな個性を持った社会人になって欲しいと思います。企業が将来とも安定的に発展するためには、地域社会との密接な繋がりが不可欠であり、そのためには、強い意志と情熱を秘めた、魅力溢れる人材が多数必要です。学業のみでなく、読書、コンサート、スポーツ観戦等の機会をできるだけ持つようにし、幅広い趣味と豊かな感性を身につけることにより、創造力ある、魅力ある社会人になっていただきたいと思います。

第3に、自分のために勉強し、投資して欲しいと思います。企業で求められる社員像は真にプロフェッショナルかどうかであります。プロフェッショナルな能力は、まず自分が何を好きか、得意かを見極めて、これだと思うものを、何年か、人一倍辛抱して勉強すれば、自然に身につけられると思います。また、英語と、パソコンは、きちんと身についておかないと、グローバル市場での活躍は期待できません。

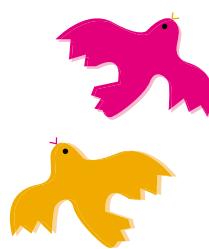
第4に、心身の健康に気を配って欲しいと思います。健康には、心の健康と体の健康の二つがありますが、心身一如というように心と体はひとつのものです。心が穏やかで気力が充実していれば、体も元気に生き生きと動ききます。体が健康でなければ心の健康は維持できません。

以上、4点述べましたが、最も基本となることは、まず社会人として、信頼される人間であれということです。倫理観溢れる、人間性豊かな社会人になっていただきたいと思います。

3. 新しい時代の主役たれ

次に、銀行業界について若干述べますと、皆さん、ご存じの通り、四大メガバンク（みずほ、三井住友、UFJ、東京三菱）が出揃い、ソニー銀行、アイワイバンクという史上初の異業種による銀行がスタートしたりと、大きく変わり始めています。しかし、このような変化の激しい時代にこそ、「変えてはならないもの」と「変えていかねばならないもの」とをしっかりと見極めていく必要があります。地域金融機関の使命は、紛れもなく、地元と共に成長発展する、お客様の夢とロマンと共に鳴し、それが叶えられるよう努力する気風にあります。山口銀行は、「地域の金融エージェント」として、地域のお客様にあらゆる金融サービスを厳選してお届けする、そう目標を定めています。金融業界は、まさに戦国時代、私も、日々ビビッドな変化を肌に感じられる金融マンとして、身の引き締まる時代の風を感じつつ、充実した時間を送っている、今日この頃であります。

最後に、競争社会の荒波に船を漕ぎいだす学生の皆さんに、強固にして柔軟な自己を築き上げ、新しい時代を拓く主役になられることを期待しております。



「若者よ！ 人生観を持って 社会に挑戦しよう」



大田 哲夫
株システムエージェンシー
代表取締役
1970年 工学部電気工学科卒

[会社概要]

所在地	東京都千代田区西神田 1-3-6
創立	1997年1月
営業品目	情報処理
従業員	18名
年商	3億円

社会環境

昨今社会を取り巻く環境は10年前と比べると様変わりの様相を呈しています。

世界はグローバリゼーションの時代に突入し、グローバルスタンダードになりうる企業が一人勝ちしていく時代に入っています。一方国内ではバブルの後遺症から立ち直れず、官公庁／民間企業は構造改革の必要に迫られています。個人は失業率の増大・リストラに対する怯え・将来に対する不安から購買意欲の減少を引き起こし経済活動がうまく回らなくなっています。

しかし世の中良くしたもので、一方では従来型企業の動きに決別し20代から30代の若者による新たな発想・手段によるニュービジネスモデルで行動する企業集団が勃興してきています。この企業集団を世の中で

はベンチャー企業・ベンチャービジネスと称しています。

私の歩んだ道

私は1970年工学部電気工学科を卒業しました。当時は商社への就職を希望していて日立製作所系列のコンピュータ関連機器輸入販売商社吉沢ビジネスマシーンズ㈱に入社、翌年4月日立製作所コンピュータ第2事業部に転籍となりました。30歳になる直前この日立製作所を退職し今で言うネットワークベンチャー企業の(株)セイコーシステムに転職しました。社員数が少ないとから経営トップの経営に対する考え方・実際の苦労等を身近に感じ取ることが出来、このときの経験が会社を興した今大変役に立っています。50歳で独立しましたが、会社を興したいという長年の夢を実現し現在に至っています。この原動力は23歳で社会に出るとき決意した「①30歳で最初に就職した会社に居るかどうか決める」「②会社に残るのであれば実力で最低限部長までにはなる」「③転職する場合40歳で独立し会社を興す」という夢を持ちつけたことだと思っています。この考え方の原点は「鶏頭となるも牛尾となるなれ」でした。「起きて半畳寝て一畳」人間生きているうちにやりたいことをしなければ生きてきた価値がないのではと思います。

就職戦線の皆さんに

今年も厳しい就職戦線が待っています。面接テクニックなどの話については物の本・担当教授の話・先輩の話等でいくらでも読み聞き出来ると思いますのでこの類の話は省きます。要は社会に出た時「自分は将来何がやりたいか！何をやるつもりか！どんな人間になりたいか！」という個人としてのしっかりした考え

をもっているか否かが最も重要になります。大学で学んだものは企業においてはあくまで基礎にすぎません。この基礎部分を実践の場で応用してゆけるかは本人の考え方次第で大きく変わります。今まで「教えてもらう・してもらう」という立場だったでしょうが、実社会に出ればそのような考え方方は通用しません。自ら「求め・探し・実現してゆく」事が基本となります。それともうひとつ重要なことは企業も個人も一人では存在しません。多くの人達や社会全体の中で存在します。「これまでお世話になった人や社会、これからお世話になる人や社会に対し、感謝の気持ちを持つ事」を忘れないで下さい。

人生観を持って社会に挑戦

社会に出る前の人生選択をしている皆さんにお願いします。これから先の社会は国も・企業も・個人も自己責任を問われる時代になります。「誰かが何かをしてくれる。誰かが自分を守ってくれる。」そんな甘い時代ではありません。自分の進路は自分のものです。後で泣きを見ない為にも、「将来を見据え、自分の人生観を持ち社会の中で何を行って生きてゆくか」をしっかりと考え方進路決定し、明るい未来を築いて下さい。

**後輩達へ「自分の未来は自分の物。自らの力で切り開こう。フレー
フレー山大生!!」**

「就職活動を振り返って」

村島 健輔

人文学部人文社会学科

4年

初めに行うこと

私が就職活動期を迎えるにあたり、まず行ったことは、就職活動の方針を確定させることでした。私は新聞記者になりたいとずっと考えており、新聞社のみ受験し、駄目ならばまた、翌年以降受験するという方針を取ることにしました。

就職活動をおくる上で、職種や働く地域など、最低限譲れないものを決めるることは重要であると思います。もちろん、それは活動中に変わることもあると思いますが、納得いく就職活動を行うためにはそのことを意識すべきだと私は思います。

エントリーシートについて

私の場合、自己分析や資料請求等の情報分析は年明け位から始め、エントリーシート（以下E S）の提出を3~4月にかけて行いましたが、E Sはその後の面接試験の際の資料となる非常に重要なものです。

私の書いたE Sの多くは志望動機、自己PR、印象に残った最近の出来事、印象に残った本や映画、800~1200字程度の作文などを書かせるものでした。

E Sの締切は同じような時期に集中するので、時間に余裕を持って書き、また、提出書類は渋らさず揃えることが必要です。

私はある企業へ書類を送った後で「受験票を返送するための切手が入ってなかった」という連絡を受



け、大慌てで送ったことがありました。しかし、これは運が良いケースで多くの企業では書類に不備があつた時点で落とされてしまうので注意してください。

また、E S提出から試験本番までは1ヶ月間隔が空くので、E Sは必ずコピーしましょう。

試験本番について

新聞社の場合、1次で筆記試験と作文があり、2次では部課長級の面接、3次が役員面接という流れで試験が行われましたが、筆記試験で受験者の7割程度が落とされてしまうように筆記試験の比重が非常に大きく、さらに、その内容が多岐に渡るものであり、新聞社を受験する場合は筆記対策には多くの時間を費やす必要があります。

面接では、最初の質問にうまく答えられるかどうかが重要だと思います。ここでうまく答えることが出来れば、その後も受け答えがスムーズにいく事が多かったようです。

私の場合、最初の質問の多くは志望動機を問うものでしたので、特にその質問の回答に関しては自分の言葉で話すことを意識しながら考えました。また、先生や友人に協力してもらい面接の練習をすることは、自分の癖などを知る上で非常に効果的です。

面接に関しては多くの出版物が出されていますが、そういったものは最低限のルールを知るために活用する程度で、あまり本に頼りすぎることはかえってマイナスだと思います。それよりも、自分の経験などを踏まえた話をした方が試験官により強い印象を与えると思います。

最後に

就職活動において最も重要なことは、ありきたりの言葉ですが、「熱

意と忍耐」だと思います。受験した全ての企業から内定が出る人などほとんどいません。不合格の通知を受けることは非常に辛いことですが、そこで後悔ばかりするのではなく、何がいけなかったのかという冷静な反省と、失敗を次に活かすという前向きな気持ちで活動を続けることが内定への第1歩だと思います。そのためには、しっかりした目的意識を持つことを忘れないで下さい。では、皆さんの就職活動が有意義なものとなることをお祈りしています。

教員採用試験を 終えて

久保田 晓代
教育学部
理科教育研究室 4年

私が大学に入学した当時からの目標は、高校の生物の教員になることでした。しかし、教員採用数の減少と、臨時採用教員や社会人の採用の増加もあり、教員になると自体困難な状況でした。今回、運良く大阪府の教員採用試験に合格し、来年は教壇に立つことが出来そうです。これも、教育学部の多くの教官や友人がサポートして下さり、導いて下さったおかげと深く感謝しています。

大阪府教育委員会によると、平成14年度の大坂府・大阪市公立学校教員採用選考テストの受験者数は全校合わせて9,930人となっており、過去5年間で最も多くなっています。最終倍率は8.4倍で、これは過去10年間で最低です。つまり、受験者数が増えても、採用者数も増えているので、倍率は低くなっています。実際、今年の合格者は昨年の2倍以上

の1,176人で、過去10年間で最も多くなっています。このように、大阪府（市）では、採用者数を今年から数年間、増やす傾向にあるようです。大阪以外の大きな都市でも、採用者数の増加がみられるようです。なお、合格者全体に対する国公立大学出身の合格者の割合は58.5%となっており、昨年より4.1%上昇しています。

その一方で、卒業見込み者（現役生）の合格者は昨年より3%減少し、卒見：既卒=27:72となっており、過去10年間で最低ですし、合格者の平均年齢は26歳と、現役生にとっては厳しいようです。しかも、平均倍率のみでみると易しくなったようでも、高等学校・日本史-92倍、高等学校・生物-89倍、中学校・音楽-60倍のように、校種や科目によっては高い競争率になっています。また、都市部以外での採用はまだまだ厳しい現状で、例えば、今回私が受験しようとしていた山口県・広島県・福岡県では、高等学校で生物の教員の募集はありませんでしたし、佐賀県の採用試験では1次試験で不合格となりました。

これまで挙げてきた事実のみで、現在の教員採用の動向を一言でまとめるることは不可能のように思います。なぜなら、各都道府県で求められる資質や人物像も違いますし、試験の内容や実施方法がさまざまだからです。もし、どうしても教員になりたくて、場所にこだわらないのであれば、いろいろ受験してみたら、良い結果を生み出すかもしれません。ただし、そのためには、受験のための勉強はもちろん、情報収集が必要です。例えば、大阪府では、1次試験では一般教養・教職教養と論作文、2次は筆記での専門科目と、日を改めての面接の3回の試験がありました。しかし、最も重要なのは、合格したときそこで働く気があるのか、どんな教員になりたいのか

という根本的な心構えだと思います。今、私は合格の通知を受け取り、喜びと共に、教育という人を育てる職業に、大きな責任を感じています。

なりたい自分になる



田中 紀子
経済学部経営学科
4年

就職活動は自分にとって自分をみつめなおすいい機会でした。私は活動を通じ、自分が何をしたいのか、何ができるのか、どんな人間になりたいのか見つけた気がします。

自己分析を制するものが就職活動を制す

私は気がつくと就職活動の中にいてわけもわからず行動していました。そのうち自分を知り将来どうなりたいのかが大事であると感じました。あこがれだけでは仕事はできません。こんなはずではなかったという気持ちが残るだけです。私は本当にこの仕事をしたいと思えるように自分に嘘をつかない就職活動をしようとしました。社会ですることは社会になにか一つでも利益をもたらさなければなりません。自分がしたいことできることを同時に満たすものは何なのかを考えながら活動をしました。

その答えをみつけだしてくれたの

は自己分析でした。自己分析とは本当の自分と向き合い自分を知ることです。私は迷った時必ず、今自分が一番したいことは何なのかを自分に問いました。正解なんてありません。自分がいいと思えばそれが正解でたとえ失敗でも何かを学べばよいのです。

人生の分岐点

私は自己分析をすることで2つの業種に絞り込み活動をしました。一つは私がずっとやりたかった仕事で、一つは自分の夢を別の視点でかなえそうな仕事です。ずっと夢だった仕事は、あらゆる人に無理だからあきらめなさいといわれ、案の定、不合格ばかりでした。しかし、私は倒れても起き上がり何度も夢に向かい挑戦しました。

結局、周りの人々が内定をもらいだし焦った私は、夢ばかり追いかけていた自分をやめ、もう一つの業種に就職することを考えました。そして内定をいくつかの会社からもらいました。今までおちることしか知らない私は、自分を必要としてくれている会社があることを知り、良かったという安心感をもちました。しかし同時にこれでいいのかという悩みをもったのです。後悔のない就職活動をするため、できることは何でもしようともう一度夢に向かって活動を始めました。自分が一生をかけてしたいことは何なのか考えました。どうしても夢をあきらめたくない自分がいることに気づき行動する前に諦めることはしたくない、何年かかるかも夢をかなえてみせると決め、もらっていた内定を辞退しました。そう決めた途端、待っていたかのように希望していた就職先から内定をもらったのです。

後輩の皆さんへ

就職活動は人生で最初の分岐点だと思います。就職することが大事なことだとは思いません。就職をしないと決めることも一つの道だと思います。就職活動の時期は自分が将来どうなりたいのかを決める大事な時期です。

まずは自己分析を通して今自分が本当にやりたいことは何なのかを見つけてください。そして見つかったのならやりたいことに向かい突き込んでください。これしかないと思った人は満足のいく道を選ぶことができます。不安やプレッシャーが自分にのしかかりますが目標があると打ち勝つことができます。なりたい自分をみつけ、なりたい自分になってください。

就職活動って このような感じ

—エントリーから内定まで6ヶ月—



岡村 俊明
理工学研究科地球科学専攻
修士課程2年

修士1年の10月頃

そろそろ、修士2年になるなあ。就職のこと考えなくちゃいけないなあ。だけど、いったい誰に相談すればいいのだろう？親は公務員を勧めるし、仲のいい先生なんていないしなあ。そうだ、本屋で就職活動の

本でも買おう。

そのとき、私は一冊の就職情報誌を買いました。そこにはこんなことが書いてありました。実力主義、採用基準、常識・時事問題、など。また、就職活動のやり方が次のように説明してあり、そのとおりに進めていきました。(1)インターネットでエントリー→(2)会社説明会→(3)筆記試験→(4)面接試験、という流れでした。

修士1年の冬

2月くらいから、インターネットでエントリーをはじめました。エントリーはじめた頃は、企業の経営理念や今後の事業展開を調べ、エントリーする企業をしぼってエントリーしていました。しかし、そのうち十分な企業分析もせずに、“新卒募集”→“エントリー”という流れがありました。2・3月で合計15社ほどエントリーして、返信を待ちました。

ながされてる。自分のペースじゃない。ただ、希望業種の新卒募集にエントリーしていただけでした。いったい、僕は何がやりたいのだろう、何になりたいのだろう？ゆっくり自己分析をしよう。それから仲間と性格や長所・短所を話し合ったり、R-CAPという適性検査も受けました。

自己分析

つまりそれは、自分がどういう人間であるか客観的に判断すること。たとえば、小さいころなにを誉められ、なにを叱られたか。小学生のとき好きだった教科や印象に残っている先生。これまで経験してきた出来事の原因とプロセス、結果とそのときの気持ちと振り返ったときの気持ちを整理する。これら一つ一つを整理してそれらのつながりや、流れを

分析できるかどうかで自己分析の深さは決まります。

修士2年の春

さて、2・3月にエントリーした企業からの返信は、待っても待ってもきません。それぞれの企業に何度も問い合わせの電子メールを送りました。それでも返信は帰ってきません。あまりにも返信がこないので、5月くらいから電話をかけ始めました。電子メールやインターネットといったIT(情報技術)は使えるのはあたりまえ、さらに電話ができる就職試験にこぎつけます。電話をしても、「今年度は新卒採用しない。」と言われることもしばしばありました。業種によっても違うと思いますが、理系の企業は電子化に完全に移行できていません。

修士2年の夏

5月に会社説明会に参加して、6月に筆記試験に合格しました。8月にやっとのことでこぎつけた面接試験です。面接では、これまでの経験の量より質を問われます。やったこととそのプロセス、その動機付けど反省点や問題点がきちんと説明できることを求められます。たとえば、「なぜそれをやったのですか?」、「その結果、どのように感じましたか?」という問い合わせ自問自答するといいと思います。

就職試験においてためされたのは、以下の能力だと思います。

- *合理的思考能力：仕事の変化に対し冷静に事態を分析しどのように対処したらよいかを見極める能力
- *目標設定・達成能力：仕事を遂行するにあたり的確な目的・目標を設定・行動する能力
- *学習能力：次々に経験することから常に新しいことを学習・吸収す

る能力

大学入試も就職活動も、結局人生の通り道でしかありません。なに(What)をやったという事よりも、なぜ(Why)・どのように(How)にやったのか、ということが大切なだと思います。人生の目標に向けて仕事を選んでいくために、就職活動は手段であり目標ではありません。就職活動をとおしてじっくり自己分析ができ、人生の目指すべきところがすこし見えてきたように思います。

あせらず落ち着いて

佐藤 晃成
工学部機能材料工学科
博士前期課程2年

うまく物事が進む時は何をやってもうまくいくし、その反対に、だめな時は何をやってもうまくいくません。ただ、すべて運を天にまかせるのではなく、いつも自分自身を反省し、そして自分を受け入れることが大切ではないでしょうか。いろいろと思慮することにより、次へ進んでいくことができると思います。

私の就職活動は、まずこれまでの自分を振り返ることからはじまりました。それは、何を学んできたかはもちろんですが、自分の性格、好き嫌い、そして客観的に自分をとらえられているかをきっちりさせることでした。その後で、やりたいこと、続けていけること、あるいは今後の生活においてプラスになること、つまり自分の進路を探していくべきいいと思います。日常考えているようで考えていない自分自身を見直すいい機会だと思います。書店などに適性検

査、自己診断テストがありますが、それはあくまで参考程度にしておいたほうがいいと思います。自分ることは自分が一番よく知っているのですから。

私はいろいろ考えた結果、企業に就職しようと決め、情報収集を始めました。私はほとんどインターネットを使用しましたが、その他にも学校にきている求人、会社情報誌などが利用できると思います。企業選びのポイントは、やりたいことを続けていけそうな企業であり、かつ自分の力が発揮できる場所を探すことでした(ただこれは働いてみないとわからないことですけど)。自分の力を十分に発揮するためには、本人の意識が最も重要なと思いますが、まわりの環境も大きく関わってくると思います。そこで会社説明会や就職試験会場の雰囲気も会社選びの基準になりました。そこに集まっている人たち(会社の方や、試験を受けに来ている学生)はどんな感じの人なのか、自分と話が合いそうか、これから先付き合っていけそうかなど、すんなりとけ込めそうな感じがあれば、それでいいと思います。

こんな調子で会社説明会や、就職試験に足を運ぶようになりました。しかし、なかなか良い結果はもらえず、あっという間に一ヶ月半がすぎてしまいました。そのうちどこかに決まるだろうという気持ちが自分にあった反面、やはり試験に落ちるとあせりも出てきました。就職は決まらないし、学校の実験のほうも進まない状態が続き、すべてが悪循環になっていました。そこで私は約半月就職活動から離れることにしました。客観的に自分を見つめなおすことと、実験の遅れを取り戻すのが目的でした。まわりのみんなが次々に決まっていくなか、この決断には結構勇気が必要でした。しかしこれが私にとっていい気分転換になり、就職活動を再開して最初に受けた会社

から一ヶ月も経たないうちに内定を頂きました。今までなかなか決まらなかったのに、決まる時はこんなにあっさり決まってしまうものかという感じでした。

就職活動において大切なのは、自分の持っている知識や学力をアピールすることよりも、どれだけ自分自身を理解して、それを相手(面接官)に伝えることができるかがポイントになってくるのではないかでしょうか。そして来年春から働くという意識をもって面接に臨むことが大切です。また今回は触れていませんが、強いて言えばプレゼンテーション能力をみがいておく必要があると思います。

就職先がちがうように、それぞれに就職活動の方法があると思います。あくまで参考であり、自分のスタイルを早く見つけてがんばってください。行き詰った時は一歩下がつてもう一度全体を見直して、それからまたチャレンジするくらいの余裕が成功のかぎです。

マイペースが一番！



貞弘 陽子
工学部
知能情報システム工学科 4年

就職活動開始

一口に就職活動と言っても、最初

は何をするのかよくわからずにいました。

結局3月くらいになって、友人から教えてもらってインターネットでの就職情報サイトへの登録をしたり、合同会社説明会に参加することで、私の就職活動は始まったと思います。

はじめのころは、就職氷河期と言われていることもあり、不安と緊張感で一杯になり、「就職」という2文字を聞くだけで気が滅入っていたと思います。まわりの友人の話を聞いていると、自分がいかに就職に対しての意識が低いかを実感し、ただあせるばかりしかできませんでした。

SPI

就職活動をはじめるまでは、私はSPIと言う言葉すら知りませんでした。現在では、就職試験の際に、一次試験などでSPIを利用している会社が多数あります。SPIは決して難しい問題ではなく、「慣れ」が勝負なので、早めに取り組んでおくのがよいでしょう。また、私はSPIと共に一般常識の問題集も購入して筆記試験対策をしていました。何もしないよりは、気休めになると思います。

自己分析

就職活動をはじめて、一番の壁になったものの一つが自己分析です。自分の性格と言うのは、実際に文にしてみると非常に難しいものだと思います。だから私は友人に自分の長所と短所を5つずつ言って欲しいと頼んだりして、自己分析の参考にしました。このとき、なるべく多くの友人に頼んで、重複する部分は採用するようにしたらよいと思います。人に聞いて改めて自分を理解することもありますから。

学校推薦

私のはじめての試験は学校推薦でした。私はもともとすごくあがり症なのですが、はじめての試験は「これでもか！」と言うほど緊張しました。結果は一次試験は何んとか通ったものの、結局は不合格でした。最終的に私は学校推薦を二回受けさせてもらったのですが、結局推薦で決まることはできませんでした。私は落ちた時にはその理由を聞いてもらいました。理由は「特に悪いところはないが、熱さに欠ける」とか、「少し元気が足りない」などでした。要するに、特に特徴がなく、あがつてしまつたためか、暗い子と思われたようです。ここで、私には学校推薦のスタイルに合わないと思いました。私には「推薦」という言葉さえもプレッシャーになってしまっていたからです。私はそこで自由応募に変更することにしました。

自由応募

自由応募に切替えた時はすでに6月の頭くらいでした。かなり遅い時期からの自由応募でしたが、私には自分のペースでできるこのスタイルがあつていたように思います。自由応募に変えてからは、すでに「ゆっくりやればいつかは決まるだろう」といった気持ちになっていました。実際に試験を受けにいっても、慣れてきたということもあると思いますが、あがつてしまつてどうしようもないという状況からは脱出できていました。そして、自由応募で3社受けて、2社から内定をいただきました。最終的に私の就職活動が終わつたのは、7月の半ばくらいでした。

結局、誰よりも遅くまで就職活動をしていたわけですが、人には個人のペースというものがあると思います

す。私も後半はいい意味でリラックスして活動できたので、そのスタイルがあつていたんだと思います。周りからの情報はもちろん必要ですが、あせるばかりでは意味がありません。「就職活動」という言葉に惑わされずに、自分にあった形で就職活動を行うのが一番よいと思います。これから活動をはじめるみなさんも頑張って下さい。

私の就職活動

中野 亜由美
農学部生物資源科学科 4年

就職活動の始まり

私は3年の11月下旬から就職活動を始めました。それまでは大学院に行くか就職するか、どうしようかとぼんやり考えているだけでした。就職活動を始めようと思ったきっかけは、友人に誘われて行った就職講演会です。その講演会でばっしと気合を入れられました。それからリクルートナビや日経就職ナビに会員登録し、企業の情報収集とエントリーを始めました。先ほど挙げた就職ナビには企業情報が山ほど掲載されており、どこから手をつけてよいか分かりませんでした。とりあえず全く興味のない業種は省いて、少しでも興味のある業種の会社紹介を一つ一つ見ていきました。その中には誰もが知っている有名企業から、ナビを見るまで全然知らなかった会社もたくさんありました。ナビに掲載されている会社にコンタクトをとるには、その会社に自分の情報(氏名、学校名、学部、質問事項など)を

メールで送らなければなりません。慣れないうちはこれに非常に時間を取られました。会社ごとに個性的な質問があることが多く、それに答えるのに一時間かかったりして、一日に2、3社しか送れないこともあります。まずは会社にコンタクトを取らない限り何も始まりません。それが分かってからはとにかく数をこなすことに集中しました。はっきり言ってあまり考えずに適当なことを書いてはばんばん会社に送りつけました。数日後に会社から返事が来ます(会社によってはメールを送った時点で選考が行われ落とされるところもありました)。

初めての会社訪問

私の一社目の会社訪問は大阪に行きました。私はそれまで一度しか大阪に行ったことがなく、その時もあちこちまわったわけではないので大阪の地理は全く分かっていませんでした。地下鉄の乗り換えで一時間迷いました。半泣きになりながら集合時間の20分前に着きました。すでに10数人の学生が並んで待っていました。20分入口で待たされ会議室のような場所に案内されました。てっきり会社説明を聞くだけだと思っていたのですが、突然「前の方から簡単に自己紹介をお願いします」と言われました。私は4番目か5番目の位置に座っていました。いきなりそんなことを言われて、準備が何もできていない私は頭が真っ白になりました。他の人はだいたい一分くらい自己紹介をしていた中、私は10秒くらいで終えました。その時は緊張のため顔は真っ赤で無表情、声は低かったです。

この会社にはもう一度呼ばれてディベートをさせられたのですが、その時も同じく緊張で顔を強張らせてたと思います。この時点での会社からは不採用となりました。それ

から2、3社受けても結果は同じでした。緊張が取れて笑いながら会社の方と話できるようになるのは4社目くらいだと思います。私は数をこなすことで面接やディベートに少しは慣れることができました。人前で話すこと、初対面の人が苦手な人は、とにかく説明会や面接にたくさん行くことが解決策になると思います。

就職活動費

お金もたくさん使いました。まず靴、リクルート用鞄、化粧品、ストッキング、黒いロングコートを買ってお金が飛びました。最もお金を費やしたのは交通費です。私は西は福岡、東は大阪までが活動範囲でしたが、交通費で15万くらいは使ったと思います。大阪にはいつも新幹線を使っていっていたので、節約したい人は夜行バスを使うといいかもしれません。

終わりに

就職活動を始めて半年ぐらい経つて、面接になると自然に笑顔が出るようになった頃、来年私が入社する会社に偶然出会いました。その面接は明らかに今までとは違うテンポで進みました。

私が調子よく会社の方と話ができて、第三次面接までとんとん拍子に進みました。会社と個人の間には相性があると感じました。しかしいくら相性が良くても、半年前の私では会社は採用しなかったと思います。無表情で低い声の新入社員なんて、どこの会社も欲しくないと思います。ほとんど体当たりであちこち会社を受けて、ばんばん落ちたおかげで鍛えられたのだと思います。これから就職活動される方は、会社の方の立場に立って、どんな社員が欲しいかを考えればよいかもしれません

ん。会社が必要とする社員になれるよう努力することが就職活動において重要なことだと思います。

就職活動を振り返って



岩山 しづか
医療技術短期大学部
看護学科3年

心構え

看護学科の3年次が始まると、“看護計画を立てないと”“国家試験の勉強をしないと”“就職活動をしないと”と頭が混乱してしまいます。そのとき多くの人は就職が決まれば勉強もがんばれるだろうという気持ちになると思います。

私は夏季休業中に就職試験を受け、無事内定を得ることができました。しかし夏季休業中は国家試験に向けて1番集中して勉強できる時なのに、就職のことしか頭になくて、夏季休業明けの国家試験プレテストは散々な結果となりました。夏季休業中ほど自由になる時間はありません。「夏季休業中は遊んでもいいから、必ず勉強すること！」という先生方の言葉が身にしみる今日この頃です。また実習中に就職試験がある場合でも、忙しくて記録ができなかったり、実習に身が入らなかったりすると思いますが、私たちは患者

さんを受け持たせていただいて勉強しているのだし、患者さんも私たちのことを少なからずは信頼してくださっているはずです。実習は実習、就職は就職と何事にも頭を切り換えていかないと、どれも中途半端な形で終わってしまい良い結果につながらないと思います。

おすすめ

希望する病院を本当に知りたいのなら、就職説明会に参加するとともに個人的に病院見学に行き、患者さんの立場から病院を見てみるのもいいと思います。また「私はすごくあがり症」という人は、第1希望の病院より第2希望の病院を先に受験することをおすすめします。私は第1希望の病院を先に受験し、顔は引きつる、足は震える、自分が面接で何を話したのか覚えてないといったすごい緊張のしようでしたが、第2希望の病院の方では1度面接を受けたという余裕があり、比較的リラックスして面接に望むことができたからです。でも第2希望を先に受験することは、合格通知も先にくるため第1希望の合否がわかる前に採用承諾書を返信しなければならなくなるということもありうるので、あらかじめ合格通知はいつまでにくるのか把握しておくことが大切です。そうでない人は、最初に第1希望の病院を受験して「私はこの病院で働きたい」という思いをぶつけてみて下さい。

面接についてですが、看護学科では先輩達が受験した結果を報告書で残したもののが、キャリアデザイン室にファイルしてありますのでそれを見て、今までどのような質問をされているのかなど面接対策するのがいいと思います。しかし内容を丸暗記していくと緊張で話が飛んでしまったり、少し違う質問をされると答えられなかったりするので、自分の考

えをしっかりと言えるように親や友達、先生方に予行練習をお願いして、アドバイスをもらうといいと思います。看護特論実習や臨床実習では自分の意見を言い、他者の考え方を聞いて自分の考えを整理する習慣づけをすると、面接にも役立てることができると思います。面接官は完璧な答えを求めているのではなくて、人柄や態度を見ていると思うので学生らしい発言や笑顔を忘れないように挑んで下さい。

最後に

私の実家は福岡ですが、就職先は東京と遠方に決めました。親や友達と離れて東京に行くのは不安でもあるし、学生とは違い社会人としての責任という大きなプレッシャーもありますが、実習が終わった今、私は実習で学んだことは自分にとって何よりも大切であり、それが励みとなっています。みなさんも実習中はきつい、つらいと思うことがたくさんあると思いますが、最後にはかけがえのないものになると思います。ナースになることを誇りに思い、目的を持って実習に就職、勉学にがんばって下さい。

就職試験は 夏期研修から



種倉 直子
医療技術短期大学部
衛生技術学科 3年

3年の夏期休暇中、本学科では自分の希望する病院や企業で夏期研修をすることができます。希望する医療施設等に、自分でお願い状を出しますが、その選択には自分が就職したいことで決定することがたいへん重要です。

私は、将来どのような職種に就きたいか決めかねていたので、研修先は総合病院、検査センター、産婦人科医院、地元の大学病院と幅広く選びました。私の場合のようにたくさん希望すると、環境変化への順応や疲労が心配でした。しかし、様々な現場で働く検査技師の方々と間近で関わり、仕事の専門性や充実したことなどいろいろな話を聞くことができ、貴重な体験ができたと思います。又、自分は何がやりたいのか、この仕事は自分には向いているだろうなど、次第に明確にすることができます。

このように夏期研修は、就職を考える上、業務内容の理解と自分の適性などの面から大変参考になります。又、職場の方達とのコミュニケーションがとれるので長期の面接をしてもらっている意味もあり、大きなチャンスもあります。私は、地元で第一志望に考えていた夏期研修先の病院から求人があり、とても

難関の受験でしたが、運良く内定をもらうことができました。採用の自信はありませんでしたが、関係者からのお話からその理由として、研修の際の態度を評価してもらえたようでした。

こうして、私は研修を通して就職活動を成功させることができました。以下に、体験を通して就職活動と研修に臨むことで、いくつか感じたことを述べてみます。

- 1) まず、研修後に履歴書を預かってくれる所がほとんどなので、研修までにしっかりと履歴書を仕上げておくことが大切です。
- 2) 研修先で共通して質問されたことは「何故、この病院を選んだのですか?」です。どれだけ意欲を持って研修に臨んでいるかがみられているのではないかと感じました。自分の考えをしっかりと持ち、それを表現できることが重要だと思います。
- 3) 何よりも大切なことは、相手への感謝と礼儀です。あいさつをきちんとし、一生懸命学ぶ姿が感謝の表れです。
- 4) 短い間ですが、前述したようにコミュニケーションを大切に考え、その職場の方達とどれだけ親しくできるか、という人付き合いも大切だと思います。従って、夏期研修は、「就職試験のスタート」といってよいでしょう。後輩の皆さん、研修は就職活動の第一歩と考え、研修先を選ぶ際は、十分によく考えて下さい。そして悔いのない就職活動ができるよう頑張って下さい。

平成13年12月11日、長引く就職氷河期を生き抜く力添えの一環として、学生の就職活動にエール（支援）を送る趣旨の座談会を開催しました。

今回の座談会は、経済学部藤原貞雄教授の司会で、学外の有識者お二人を迎える、学内から吉村副学長（キャリアデザイン委員会委員長）、各学部のキャリアデザイン委員会委員・就職担当教官、学生生活課河村憲生専門員（就職指導担当）の就職担当教職員で語り合っていただきました。

2002年就職戦線 —就職氷河期を生き抜く—

出席者

藤原 貞雄教授

司会（経済学部）

岡田くみ子 代表取締役

（株）ぶらねっと

片岡 勝 代表 市民バンク

吉村 弘 副学長

キャリアデザイン専門委員会委員長

（主事）

武田 賢治教授

キャリアデザイン専門委員会委員
(教育学部)

中田 範夫教授

キャリアデザイン専門委員会委員
(経済学部)

田頭 昭二教授

就職担当教官（理学部）

河野 俊一教授

キャリアデザイン専門委員会委員
(工学部)

山内 直樹教授

キャリアデザイン専門委員会委員
(農学部)

河村 憲生専門員

学生生活課就職担当

小谷 典子教授

広報活動専門委員会委員長

（人文学部）



（司会者）
藤原 貞雄 教授（経済学部）

藤原 本日、これから2時間の座談会のかじ取り役として進行させていただきたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

今回の座談会は単に学生へのエールということもちろんありますけれども、私たち自身が大学の教育において学生たちのキャリアデザインをどう具体化していくのかという原点にさかのぼり、話を進めていきたいと思っております。

最初に、きょう大学外から御参加いただいたぶらねっとの岡田さんや市民バンクの片岡さんについては、最初に自己紹介をしていただきたいと思います。また2人は、今年度キャリアデザインの非常勤講師をしていただいております。

岡田 ぶらねっとの岡田でございます。藤原先生には、異業種交流のほうお世話になっています。その関係で、キャリアデザインにもお声を掛けていただき、私の経験をお話しする機会をいただいております。日頃より大変お世話になり、ありがとうございます。

藤原 岡田さんは大変女子学生の厚い支持を受けておられます。

片岡 私は、2年ほど前から人育てということをやってみようかなと思って始めましたが、予想以上に大変でして、全然思うとおりいかない

ですね。あと2年ぐらいで日本を去りまして、世界で今度人育てをやろ



片岡 勝 代表
市民バンク

うかなと思っております。最後の余生をそれにしようかなと考えております。

藤原 片岡さんは、山口大学の学生起業支援について、学部を超えて1年生から4年生まで指導をしていただいております。

では、吉村先生少し全体的な事を話していただきましょう。

吉村 就職関係だけでなくもう少し広い範囲に考えてキャリアデザインになっておりますが、中心はいずれにしても就職の問題なんです。近年の学生は前と大分変わりまして、いいよ、それでいいよとか、そしたらどうとか、一歩後ろから手で押してやらないと自分のことを自分で決めるのがなかなか難しい学生がかなりいるように思います。それで、学部と同時に全学的にも取り組まないといけないというので、この委員会を今度つくってもらったわけですね。また、就職の状況が厳しくなっていますので、学生の方はもう入ったときからそのことを念頭に置いているというか、潜在的に皆心配していることがわかります。しかし、自分で具体的に一步踏み出して行動するということが非常に少ないよう思います。それで、キャリアデザイ

ンの授業を共通教育で用意させてもらつたわけです。これは私は非常によかったです。

その目的は、就職の仕方のようなことももちろん大事なことですが、この講義のねらいはむしろ自分の人生設計をする、それについて考えてくれと、そしてそれを通じて大学生活をどのように送ろうとするか、そういうことを1年のときから考えてくださいというような、それの助けになるような授業をしております。非常に好評で、毎回レポートを出してもらったんですが、全体の評価は一般的によかったです。

それからもう一つは、これは大学の側ですが、出口、入り口、ともに今からの特に法人化を迎えての大学にとっては大事なわけです。高校生も、保護者の方々も皆就職のことを考えて選んでいるんですよね、余り表には出さなくても。そういう点でも大学の評価にもつながりますし、就職が大事だと思っています。

各学部の就職状況 活動について

藤原 次にそれぞれの学部での特徴的な就職活動、とりわけ今年度の就職活動、リクルートの状況の変化だと特徴だとか、それから逆に学生側がそれに対してどういう反応を示して、主体的な取り組みを示していくのかみたいなことを少しお話を聞いていただきたいと思います。人文学部からお願ひします。

小谷 人文学部の学生を見ていると、男性と女性とで、キャリアデザインということで言うならば違いがあるように思えます。今までの性役割の影響かもしれません、男子学生は職を見つけるということに一生懸命なんですね。希望はあっても、ぎりぎりになってきたらこれでいいと。女子学生の場合は、崇高な希望を固守する傾向が強いようですね。そういうところから、男女の仕事に

対する考え方の違いを少し感じます。



小谷 典子 教授
広報活動専門委員会委員長

就職ではなく、キャリアデザインというようになってくると、自分の生き方を考え、その目的に向かって、自分のキャリアを形成していくかなければいけないと思いがちなんですが、それをどう考えたらよいのか、特に片岡さん、岡田さんにお尋ねしたい。学生に対して、とにかく仕事を見つけなさいと後ろからあと押しするのか。もう一年頑張ってでもあなたの目的を達しなさいと押すのか、それを考えなければいけないですね。

武田 教育学部の就職状況について言いますと、御承知のように教員の採用者数が昨今激減しまして、それによって教員への道が極めて難関となっているという状況なんですね。そのことが結局、学部全体の就職率を下げているわけです。しかし、最近少し明るい兆しが見えてきていると言われています。先般、新聞報道にありましたように、首都圏とか関西圏を中心にしまして少子化に歯止めがかかったということと、少人数学級を実現するということで、これからは教員の採用者数が増加するだろうと言われております。やっと長い冬が過ぎて春が来たという感じです。しかし、本学部では山口県教員の希望者が圧倒的に多いわけなんですが、山口県の場合は小規模校が多くて教員の数が既に足りているということで、今後しばらくは増加は見込めないだろうと言われています。ですから、学生諸君には、教員

という職業を選ぶのであれば、地元志向から脱却して受かりそうな都道府県の教員を目指すということも考慮に入れて欲しいと思っているところです。

それと、就職講演会や学内模試などをとおしてこちらは応援するんだけれども、学生の参加が少ない、乗りが悪い状況が大変気になっています。たとえば、教員採用試験は難関なので自分は受かりそうにないと、なかばあきらめムードになっているのではないかね。

学部で行っているいろんな支援行事に積極的に参加した学生が、良い成果を上げているのが現実なんですがね。機会があるごとにそのことを学生には言ってきます。

藤原 キャリアデザインの最後の授業でアンケートをとります。「あなたは今の時点で希望する仕事につけそうですか」という質問をするのですが、もう9割以上は「希望する仕事にはつけないと思う」と回答します。これ学部を問わないので、非常に早い時点ですまり1年の月で職業と大学生活との関係を諦めてしまうという傾向がありますね。



中田 範生 教授(経済学部)
キャリアデザイン専門委員会委員

中田 経済学部の話をしますと、まず仕事選びということで言うと、今言われましたように今の学生というのは大企業志向という学生は少ないんですよね。「君の力ならもっといいところへ行けるんじゃない」というアドバイスをするんですけど、「先生、私は一生のことを考えると、地元で親の近くで暮らした方が圧倒的にメリットが大きいんですよ」と

いう、こういう非常に計算高い、ある意味では非常に我々は何もそういうことを教えないのに、生活実感の中からも少々給料もらっても都会で暮らすのは貧しいということをよく知っているわけですよね。そういう学生が地元志向ということでふえてきたということですね。

先ほど小谷先生が言われましたけど、女子学生の問題ですけど、経済の場合はもう最近は女子学生の方が就職いいんですよ。昨年度のデータを見ましても、女子学生だけだと83%の比率です。

次に、公務員の話ですけど、2年ぐらい前から経済学部の教室を使って公務員の講座が開かれてますね。先ほど教員のことと言いましたように、採用数がとにかく減るんですよね。ですから、大学に入って早い学生は2年ぐらいのうちからこつこつ勉強をしております。

小谷 最近の傾向として、先ほど地元志向が強いと言われましたが、もう一つ最近気になるのは、親離れ、子離れ、どちらかがうまくいってなくて、学生が決めた仕事を親がだめだという傾向が強くなってきました。そこでキャリアデザインの一番最初に、まず親子を分断することをやっていただく必要があるのではないかと思います。例えば、女子学生の場合は、4年も大学に行ってそんなところに就職したのでは恥ずかしいと、親が言うんですね。これが女子学生の就職を悪くしている理由の一つのようなんです。

片岡 親が阻害要因というのと同時に、先生が阻害要因ですよね。先生がこういうふうに言ったんでやめた方がいいと思うということを言う。僕から見ると、えらい古いこと言う先生だなと言うんですけど、そういうふうに本人の可能性を本人が選ぶときに邪魔するのは親と先生ですね。

河野 工学部は、学校推薦が8割

で、自由応募もふえていますが、やはり学校推薦が基本となっています。また、自由応募で応募していても、これを学校推薦にかえてくれないかという、企業からの要望もあります。というのは、いったん確保しても自由応募だったら簡単にやめられるが、学校推薦という縛りがあるので求人数を確保しやすいということです。ただし、学校推薦といいながら、推薦しても企業は簡単に落とすのです。

また、企業さんにちょっと注文をつけたいことがあります。昔は入社したら、その会社のためにという愛社精神が求められたように思います。しかし、最近ではその要望が希薄になっています。それはそれでいいのです。しかし、企業の年輩の方が講演された時の印象では、企業は愛社精神（日本流）とドライ（アメリカ流の能力主義）をあわせもった人を望んでおり、これは矛盾しているように感じました。現在は、どういう会社になれば日本の企業も生き延びていくのか、どのような人物がほしいのか、模索をしている時代だと思います。その意味（上がはっきりしていない）で、学生は少しかわいそうな気がします。



田頭 昭二 教授(理学部)
就職担当教官

田頭 理学部では6講座あります。それぞれ就職委員が設けられて、そこがケアしています。それから、指導教官が五、六人ずつそこの生徒の就職活動をしております。私の経験からお話をすると、就職率を考える場合、大学院と学部は分けて考えないといけません。学部の場

合、就職率は86%ですが、就職率の変化、落ちているということよりも中身が変わっています。昔は、化学、物理、数学等専門分野に近いところに就職していました。ところが、現在では学部卒業生は、銀行や出版社、それから公務員、教員を希望します。大学院の場合は、専門分野に近いところに就職しています。また、指導教官の強い指導によって、就職先を決めると、すぐやめてしまうケースが多いことから、できるだけ学生の希望を聞くようにしています。結果的に就職が決まるのが遅くなるんですが、それでも自分の望むところに行くように勧めてはおります。

それから、企業側は学生に勤労意欲、理性、責任感、忍耐力、創造性を求めているんですが、私は学生に自分自身のキャリアとか、自分の能力をそのまま見てもらいたいなさいというような指導をしているわけです。

大学院になると、企業側は専門的な知識を要求しますのでかなり厳しくなります。ですから、自分の専攻分野の技術面を磨くよう指導しています。

藤原 マスターで就職される方は多いですか。

田頭 ドクターは、留学生や企業の方が多く、また理学部系卒業者はアカデミーポストの希望が多く、民間会社に入るというのは余り多くはありません。

藤原 マスター卒と学部卒では就職率どちらがいいんですか。

田頭 マスターの方がいいです。

藤原 工学部もそうですか。

河野 工学部も同様です。

藤原 工学部のマスター卒も専攻分野に近いところに就職しているのですか。

河野 専門といってもかなり工学部は幅が広いですが、やはり製造業が非常に多いです。製造業というのは、ソフトの開発も含めてのことです

す。

それから、公務員の志望も多くなっており、非常に厳しいので、就職率の低下にもつながっています。



山内 直樹 教授(農学部)
キャリアデザイン専門委員会委員

山内 農学部の現状ですけど、就職率が学部の方はだんだん下がってきてるというような事情がござります。ただ、大学院の場合は9割ぐらいあります、やはり学部より大学院の方が高い傾向にあります。実際、大学院進学率も高くなっています。

藤原 何割ぐらい大学院に。

山内 40%です。農学部も技術職、研究職希望の学生が多く入ってきてるので、進学希望が高いのだと思います。

学生の指導は指導教官が担当することになります。ただ、農学部も研究職とか技術職というようなことを考えて入ってくるんですけども、それでも将来がはっきりわからないという学生がいるわけです。それで、私は一体何をすべきかというような将来のビジョンを考える指導と、それがある程度固まって就職の指導に入していくということをやらないと、将来自分が目指すような道に行けないんじゃないかなと思います。

しかし、将来設計について強い指導をしますと、就職先とか将来を固守してしまいます。それで、自分の将来設計との矛盾を感じ、やめてしまう危険性が生じることが心配です。だから、ある面もうちょっと幅を持たせて、そこで生きがいを見つけていくようなことも必要なんじゃ

ないのかと思います。

片岡 今の先生のお話を伺っていて、就職というのは今の日本の秩序が形成されている中でのある役割に送りだす。これが壊れたわけですよね。先生が迷われるのとてもよく分かります。私はやりたいことをやれ、妥協して生きるなど、こう教えています。私は、先生も将来のビジネス、社会像に対して役立つことをNPOでもいいから雇用を創出するという発想まで持たないと、多分悩みは尽きず深まるばかりだと思います。

藤原 岡田さん、続いて何かありましたら。

岡田 私自身を振り返ってみて、学生時代単純に好きなこと、嫌いなことというくらいは明確だったようになりますが、高校生のわが子を見ていると、それすらはっきりしていないように感じます。豊かだからでしょうか、こうしたい、ああしたいという欲求自体が非常に少ない、または欲求を感じ取る力が弱いと思います。

私は、常に自分の目的、目標を明確にして、それがある程度片付いた時点で、その目標が達成されるかどうかというのを自分自身でフィードバックしていくというやり方をしておりました。

この場合の目標とは、何かをするとき、そこで何を学ぶのか、とか何を自分が吸収したらそれでよしとするのかということを設定するというような意味ですが、その連続が結果、道となってきたと思います。そういう意味では、はじめから何になりたいとか、どういう職業に就きたいというところまで目標を高めてしまうと学生さんにとっては難しいのかもしれません。

ひとつの教育のあり方として、自分がしていることをその都度一つ一つ明確にし、最終的なゴールに積み上げていく「振り返り」、フィード

バックを重ねる体験学習が必要ではないかと思います。

ただ、自分自身で何かを作っていくという発想は必要だし、そうした発想を先生が指導されれば、片岡先生の言われる方向にもつながっていくのかかもしれないなと感じます。

藤原 河村さん、どうですか。日常的にセンターで学生がかなりあれこれと相談なのかわからない話を持つてくのではないかと思うんですけども。

河村 私は学生を3つに分類できるんじゃないかなと思います。我々が一番問題にするのは一番下の3分の1、それとその次の3分の1ですね。それらの学生がどういう学生なのかというと、例えばあいさつができるない、そして自分をきっちり我々に自分の希望とかそういうものが伝わってこないという感じです。岡田先生からありましたように、今何を



河村 憲生 専門員
学生生活課 就職指導担当

学ぶべきなのかという時点で、その辺のところを明確にしていく。今の学生はレールに乗ってそのまますっと行く、何も考えなくても前に進めるというそういう環境の中で育っているということで、やはり私としては人格論なりあるいは教養論というものをやっぱり押し出したところでの教育を少し考えるべきなのかなというようなことを考えております。

片岡 僕、中間の人は相手にしなくていいと思うんですよ。上の3分の1、これを相手にするのと、あの3分の1はもうフリースクールだと思って、真ん中はどっちかに入ってくれと、そのくらいの感じで分ける

現実に僕は来ていると思いますよ。

田頭 ところで就職のことを考えると、会社なり公務員なり皆価値観を持っているわけで、ベクトルが一方に向いているわけですね。就職世話をするときには、それに今まで生きていくためにどれかに乗りなさいということであちこち向いたのをそろえて行っていたわけですが、それができないような時代が来ていると感じます。ですから、そういう新しい考え方を取り入れた上で、もう一度キャリアデザインというのを考える必要があるんじゃないかなと思います。

山内 それと、関連してますが、今キャリアデザインで講義されていますけど、これがだめならあれがあるというふうな幅を持たせたようなことを、自分で考えられるような教育というものが必要じゃないかなという気がしています。

片岡 私は学生の個性と社会の将来性をマッチメイクしていくことが、教育だと思っているんですよ。ですから、こういうことをやりたい、こういう能力を潜在的に持っている。それに対して社会が今君に合わないと、しかしこれからこういう社会になると、それだったら今これ始めておきなさいというふうにすると、努力をしろとか言わなくても、おもしろい方向がひたつとはまればひとりでに努力する、そういう環境をつくるのが私は教育だと思うんですね。だから、先見性と個性を見る目があれば、先生は努力を言わないでいいと、そういうふうに僕は思っています。

中田 仕事のおもしろさみたいなものに気づくというのは、やはり今の会社とか組織が大きくなっていますから、自分がその会社の中の本当に一部分、歯車になって働いたときに、おもしろを感じるまでに相当かかると思うんですよね。だから、自分は何のために働いているのかと

いうような気持ちを持っていないと、意義を見つけにくいと思うんですね。

藤原 だから、そういう意味では僕は今のような中途半端なインターンシップではだめだと思うんですね。生きる一つの現場である労働というのもと、大学というのがもっと入り交じるような、そういうところまで持っていくかないと。なかなか今おっしゃったような時間を学生は持てないですよね。

片岡 今朝の新聞にもありましたようにリクルート調査によると、企業側は社会貢献と言うけど、学生はキャリアを積むこととおもしろいことというので会社を選びます。まさに豊かな時代の若者たちはおもしろくないとだめですよ。極端に言えば、おもしろさを先生方が企業に要望するんじゃなくて、おもしろい企業にしていくようなコンサルタントまでしないとですね。

各学部の就職支援の取り組みについて

藤原 今は就職指導から就職支援にさらに、キャリアデザインという形で非常に広くとらえられるようになっているんだと思います。

就職支援あるいはキャリアデザインの基本というのは、大きな会社に行けというんじゃなくて、学生が大きな会社に行きたいんであればどんなことが必要なのかということを教えてやる、あるいは一緒に考えてやるということですね。

だから、就職支援活動というのは、基本的には就職率が上がればいいといふんではないと思います。先ほどもお話が出ましたけども、労働省の統計でも大卒は就職後3年間で3分の1ぐらい退職していくんですね。離職率が高まっている。就職率が上がることだけを目標とすると、学生が就職する理由を見落とすことになる。むしろ国際青年意識調査な

んかによると、会社への忠実度は日本の若い社員の方が欧米より低くなっている。これは日本の若者の最近の特徴だと思うんですけど。そうすると、僕たちは就職率という表面的な数値にとらわれるんではなくて、学生たちがまず自分が何をしたいかという夢をはぐくみ形にすることを一緒に考えていくということが必要ですね。



武田 賢治 教授(教育学部)
キャリアデザイン専門委員会委員

武田 藤原先生のおっしゃることはよくわかるんです。学生にとって大学というのは、将来自分がやりたいことを見つけ、それを達成するのに必要な能力を身につける場であって、大学は学生の夢の実現を応援するという、そういうところだろうと思うんですね。だけれども、少子化に伴う大学就業人口の減少を考えると、やはり就職率というのは見過ごすことはできないんじゃないかなという気がしますね。これから大学のサバイバル競争が始まると言われてますから、魅力ある大学づくりをしないと、学生が集まって来なくなりますよね。魅力のある大学の要件には、教育研究スタッフの充実、学生生活施設の充実とか、いろいろあると思うんですが、その中に就職が良いということが入ってくるんじゃないかと思うんですよね。ですから、そういったことを考えると、大学全体として学生の出口について一層力を注いでいかなくちゃいけないと思うし、出口を意識した大学教育の有り方を考える時期に来ているのではないしょうかね。

片岡 それは夢の実現する大学とい

うことで私はとてもいいと思うんですよ。だけど、そういうカリキュラムになっているか、先ほどの時間も含めてそういう体制に先生方が時間とれるかですよね。そういう夢の実現を応援するのだったら、本当にそういうふうに見直さなければなりません。それから、集中したときに生徒というのは伸びるんですね。そういう意味で網羅的なカリキュラムのあり方をもっとフレキシブルにしたり、見直さないと夢の実現は応援できないと思うんですね。



吉村 弘 副学長
キャリアデザイン専門委員会委員長

吉村 大学の教育で考えて、就職と切り離しても教育というはあるわけです。就職活動は学生が恐らく初めて社会というものを自分の問題として対決する、意識する、その契機になっていると思うんですよ。そして、落ちる等の経験を通じて恐らく初めて自分のこととして社会の厳しさを知る、そして自分で考える。そういう契機になっている。そういう意味では、普通の大学の教育と同じように学生にとってはいい機会ですね。

片岡 これから大学というものを僕見て、対応性でとってもいいと思うんです。だけど、自己責任というのが先生方お一人お一人に必ずしもきちっと見られないんですよ。ですから、先生の方から一歩出て、将来像に対してどういう学生を育てるかということについて明確に意思表示すること、それが僕自己責任だと思うんです。

吉村 大学全体としてというのはなかなか難しいけど、個人とすればゼ

ミではそれができるわけですよね。
片岡 例えば、こういう場でよろしいんですけどね。大学は本当に人格形成とかアカデミーが大事だと思います。だけど、もっとそれを磨くためにも検証されること、それを意思表示し合う、幾つかの場でそうすることが大事だと思います。

吉村 私はゼミ生を見てて最近よく気づくのは、男性や女性というのは余り関係なくて、意識のはっきりしている人、決断がはっきりできる学生は早く決まる。なかなか決断ができる学生はなかなか決まらないんですよね。やはりそれこそその学生の自己責任なんでしょうかね、それを自分ではっきり受け取る意思表示をする人は、比較的スムーズにいくんですよね。

藤原 そこをもっと深く掘り下げるシステムあるいは教育といったものが何か必要な気がしますね。



岡田 くみ子 代表取締役
(株)ぶらねっと

岡田 先ほどからお話ししていますが、簡単に言えば快・不快というものを自分自身できちっと区別ができ、常に自分の気持ちを整理して明確にできる力をそだてないと私は思っているので、今自分を表現する、自分がどう感じるのかというところを形にしていく力を育てる教育ということは、大学だけではなくずっとこれから先必要だというふうに思っています。自分自身を常に明確にしておくということです。

そして今、形にするということを心がけることによって、自分自身の快・不快が明確になっていき、それがすなわちキャリアデザインにもつ

ながっていくでしょうし、将来設計ということにもなっていくような気がするので、まずはもっと身近な自分自身を形づくるというところがキャリアデザインになっていくのではないかでしょうか。

ま と め

藤原 きょうの座談会は、大変重要な提案が出ていると思います。もう少し具体的にそれぞれの学部でこうしたことを強化していきたいという点を最後にお話ししていただきたい。それから、学生に呼びかける言葉を最後にお話ししていただきたいと思います。

武田 教育学部では、キャリアデザインや就職支援については、学生と教官と組織が三位一体となって取り組まなければいけないと思います。例えば、学生について言えば、10年、20年、30年後のライフデザイン・キャリア達成目標を描いて、それと同時に大学4年間の短期の実行計画をきちんと立てることです。今私は、自己申告制度というものを考えています。毎年学年の初めに1年間の達成目標を掲げて、そのためには必要な知識・技術の習得を自ら計画し、申告する。半年後にそれを見直し、学年末にどの程度その年の目標を達成できたかを検討するという、学生の自己点検評価ともいいうべきものです。そのようなものを取り入れたら thought たりしています。

そして教官の方で言うと、多様な気質と価値観を持つ学生に対して、今後はきめ細かな指導を低学年より行ってゆくことがますます必要になってくるのではないかでしょうか。

それから学生に対してですが、教員志望者に、明るい兆しが見えているということなので、早目に準備し、初志を貫徹してほしいと思いますし、一般企業に希望している学生には、“教育”をキーワードにした

教育学部ならではのメリットを全面に打ち出して就職活動に取り組んでほしいと思います。

田頭 理学部では、今まで議論してきたなかで、理科系の学問は、多様性とか可能性を追求することで、知識享受型です。これを外すのが非常に難しいわけです。そうするとやっぱりプロとしておもしろみがわかるところまで自分の専門性を追求する。特に、大学院になるとそれが必要になってくるわけです。それをクリアしないと、基礎学力がつかない上に応用能力もつかないと思います。

それと、女性に関して私が会社の人と接する限りにおいては、このごろ社会が進んできて、男性だから女性だからと差別するということはないと思います。一般的に女性の方が、努力している、その結果が見えることが多いわけです。男性でも、もちろん優秀な学生はたくさんあります。学生には、ぜひ自分のやりたいことをしっかり見つめて努力してほしいと思います。

河野 さきほど片岡先生の話では努力するのが必ずしもよくないといわれましたが、何に努力するかが必要であると思います。工学系にはいった学生にやりたいことを聞くと、イメージとして、ロボットを作りたい、飛行機を作りたいという答えがかえってきます。ところがイメージだけでは物はできません。例えばロボットを作るためには、機構、強度評価や材料についても学ばなければなりません。“まず目標をたて、その目標に向けて裾野の分野をクリアしないと、君の面白いところにはどかないよ”、といいたいのです。

就職に関しても同じことがいえます。工学系では悪いといいながら就職の努力をすれば、職はあります。イメージとしての希望の職種があれば、その職につくために、“今何をするか”をきちんと自覚することが

必要です。就業への自覚とそれに向けての努力があれば、学生にとって現在は必ずしも氷河期とはいえませ



河野 俊一 教授(工学部)
キャリアデザイン専門委員会委員

ん。また、前言と矛盾しますが、氷河期に就職した人の方が職場で活躍される場合が多いと聞いています。ですから、“不況だからといって後ろを向かず、前を向きなさい”ということを言いたいと思います。

山内 農学部も理系なので、専門性というのが非常に重要だし、将来を含めた中で、いろいろ考えたり、それが発想の助けになるし、そういうのをきわめていってほしいなという希望があります。

ただ、学生が入ってきて自分の就職を考えた場合、やはり目標というものをきちっと持って、早く自分は何になりたいかというの持ってほしい。できれば、専門を生かしてというようなことが考えられるのですが、ただ先ほども言いましたが、ただ敗者復活もあるよと、何か別の道も見つかるんじゃないかということを言って、少しはそういうふうな道を考えながら将来しっかりしたものを見つけてほしいなと思っています。

中田 経済学部ですが、教官の方の対応は、経済学部はことしの4月から2年生からゼミ生をとっているということもあって、3年間つき合うわけです。これを使わない手はないと思います。一番学生と接触の頻度が高くて、内容的にもよく学生のことを知っている人に就職の面倒も見てもらうということが、一番いいと思うわけです。我々のところへたま

に学生が来るわけですが、その学生を初めて見るわけですから、どんな性質を持っているのか、それはわからないわけです。その点やっぱりゼミの先生は、わかっているわけですから。これはもう仕事なんだということで対応していただきたいと、そういうふうに特に先生の方に意識変革、就職については意識変革をしていただきたいなど、そういう希望を持っています。

学生に対しては、先の読めない社会ですが、それをあくまでも自己責任で将来を読むことです。そのためにはやっぱりいろんな知識が必要なわけで、自己責任ということをエールとして送りたいなと思います。

片岡 自分でも小さい事業をやっていて、どういう学生が一緒に働いてほしいかといえば、やっぱり逃げ出さない学生、どこまでもしつこく最初に言ったことは一緒にやろうやと、言いわけ言うなよなということがもう最大ですので、逃げない学生を欲しているんですよということ、意外と知らないかもしれませんね、学生は。

それから、学生へのエールとしては、もう不安定が前提の社会。だから、今までの価値観で選択するときっと間違う。そういうアドバイスをする先生や親の言うことは聞かず、自分の目で本当に将来を二、三十年後を考えて選択するんですよ。そして、逃げずに挑戦していけば、僕はおもしろい道が幾らもある時代、逆に言えば。というのを実感していますので、本当にいい時代に生まれたねと、氷河期こそ最大に君らの個性を生かせる時代ですよと、本心からそう思います。

岡田 インターンシップについては学生さんにも、そして学校側にも申し上げたいことはあります。

インターンシップは、企業に入れれば企業の実態が見えるという割と安易な考え方になっているのではな

いかと思います。企業側としては、実際に給料を支払わないにしろ、インターン生を受け入れれば、労力という形で学生に経費を掛け、先生に代わって面倒を見るというというのはボランティアの以上世界です。学生側にも何か教えてもらった代償に何かお返ししようというお役に立とうという気持ちがないと、受け入れ企業側としても不愉快な気持ちが残りますね。大学側からも学生に対して、「お役に立って来い」というような声掛けがあってもいいのではないかと思います。

河村 私いつも感じていることは、やはり学生自体非常に情報を集めるのは上手なんですが、これを分析して結果を得るという、そこが非常に劣っているように思います。それから、物事がなるということは、やは

り情報を集めてそれを分析して、そして行動に移すという、このところを教官には教えてほしいと思うし、学生にはその部分を育ててほしい。そのことが先ほど言ったような人格論とかいうような部分にもつながってくるのではないかと思っておりますので、その辺を両方に対してのエールを送りたいと思います。

藤原 それでは、吉村先生、最後に全学的立場として。

吉村 全学部の学生支援の一環として就職支援活動を強化したい。これはもう変わりはないことですよ。具体的には、就職アドバイザーの制度を今度設けましたけど、今問題だなと思っていてしなければと思っているのは、各学部でしている活動と全学との取り組みにどんな協力関係をつくり上げていくか、徐々にでき

上がっていいくのでしょうかけれども、今からそれをやらなければと思っています。

学生へのエールといいますと、自分を考える契機としてチャレンジしてほしい、そうすれば道はおのずと開けると、こういうことでしょうか。

藤原 どうも2時間近くありがとうございました。

僕も学生へのエールを一言、大学は人生の滑走路だと、だからこの滑走路でエンジンを100%吹かさない限り大空には飛び上がれない伝えたい。飛び上がりさえすればもう後は自由に行けるわけだから、とにかくエンジンを吹かしてほしい。

では、きょうはどうもありがとうございました。



TOPICS



第7回運営諮問会議

松野議長から廣中学長に 「学生生活の充実について」 の提言を提出

■本田 正春 企画・広報室

平成13年12月4日(火)開催の第7回山口大学運営諮問会議で、廣中学長からの諮問事項である「学生生活の充実について」の提言が取り纏められ、当日の会議において松野議長から廣中学長へ提言が提出されました。

なお、会議終了後、松野議長及び廣中学長が記者会見を行い、提言及び議事内容について説明をされました。提言及び当日の議事内容は次のとおりです。

学生生活の充実について（提言第3）

我が国の高等教育を取り巻く社会状況が今正に大きく転換しつつあり、21世紀初頭は各国立大学においては大幅な変化の時代になるものと考えられる。

さて、少子高齢社会が進行し、大学の大衆化も進む中において、国際競争力の重視や産業構造の変化による雇用形態として従来になかった新しい分野の人材も求められ、また一方では、去る6月に文部科学省から「大学（国立大学）の構造改革の方針」が発表され、また9月には「新しい「国立大学法人」像について」（中間報告）が公表されたところである。このような状況の中において、地域の基幹総合大学である山口大学に対しては、今まで以上の自己改革（構造改革）に積極的に取り組まれることが期待されるところである。

このたびの諮問事項である「学生生活の充実につい



中国新聞 平成13年12月5日掲載

TOPICS

て」については、大学への進学率が上昇するに伴い、多様な能力等を有する学生が山口大学に入学することとなり、これらの学生に対する正課教育の補完としての正課外教育の充実方法が主な提言の内容となる。また、この提言第3は、前回の「社会が求める学生教育の在り方について」とも関連するものであり、本来であれば前回の提言に盛り込むべきであった内容を若干含んだものであることをご了解頂きたい。

I. 学生の課外活動への支援について

1. 課外活動を支援するためには指導者の育成を行う必要があり、そのためにはFD研修（ファカルティ・ディベロップメント）の中に課外活動に関する研修項目を盛り込む必要がある。
2. 学生の主体性を育てるためには、地域活動ヘーテーマを持って参画するなどの方法を検討すべきである。その内容は、教養教育の一貫として、レポートを提出させ単位を認めるなどの方法も考えられる。

(概要説明)

山口大学において豊かな学生生活を送るため並びに価値観が多様化した社会で生き抜くためには、正課教育の補完としての正課外教育の役割は非常に大きく、少子家族の中においては、特に、学生間や教職員及び地域住民との人間的なふれあいが、学生の人格形成に重要な役割を持っている。

山口大学が学生の人間形成に対する責任を果たす上においては、課外活動に携わる指導者の育成が遅れており、FD研修（ファカルティ・ディベロップメント）の研修項目の中において、課外活動に関する事項を盛り込むことを求めたい。

また、入学する学生の多様化に伴い、具体的な学習目的を持たずに入学する者や様々な悩みを持った学生が多く在学する状況となり、これらの対応策として、学生に主体性を持たせる教育指導が必要である。例えば課外活動に関しては、テーマを持って地域活動やボランティア活動に参画する場合の支援や評価（単位を与える等）することなどにより、学生がより多く社会との接点を持つこととなり、逞しい人間の育成に繋がるものと考えられる。

II. 修学指導や相談体制等の在り方について

1. 教官は学生の名前を一人でも多く覚える必要がある。
2. マン・トゥ・マン方式を基礎としたアドバイス制度などの確立やオフィスアワーの充実が重要である。
3. 学生の入学後の転学部・転学科の進路選択を柔軟にするために、例えば、学生募集を学部（4年制）あるいは分野単位に変更するなどの体制整備に取り組むことが求められる。
4. 学生に対する厳格な成績評価を実施する必要がある。
5. 学生の視点に立つため、学生による授業評価システムを構築し、授業内容の改善に努力すべきである。

(概要説明)

学生が山口大学での充実した学生生活を送る上においては、学生個人と大学との精神的な接点の深さが大切であり、特に各教官は、学生に一歩でも多く近づく努力が必要である。その一つの努力目標として、各教官は学生の名前を一人でも多く覚えることを提案したい。その他新入生全員を対象に及び2年次生以降のゼミナール指導においてマン・トゥ・マン方式を基礎としたアドバイザー制度の確立や全教官にオフィスアワーを更に

TOPICS

充実することは、学生が教官に相談しやすい環境づくりに有効であると考えられる。しかしながら、教官は成績評価をする立場にあることから、多くの学生は教官に直接相談することに抵抗を感じており、そこで学生相談の窓口を常時開いて、ここにある程度責任を持って学生相談を処理できる事務官を配置することも極めて重要である。大学はその人材育成をも図る必要がある。

また、近年、進学率の向上に伴い、個の確立が図られていない学生が多く入学するようになってきた。彼らは、いわば、大学に入ってから「自分探し」を始める。学生の興味・関心・能力に応じて、転学部、転学科や自己の適性に応じた分野の専攻が選択できるような体制に整備することが求められる。一部の学部を除いて、少なくとも、学部（4年制）あるいは分野単位での学生募集に変更する必要がある。これにより、意欲を持つて学生生活を送ることが可能になる。

一方、社会からは質の高い学生と社会に貢献する人材が求められており、大学教育において、補習授業という視点も含め、学生の卒業時における質の確保を図る上において、大学での講義は自主学習を前提としたものとする必要がある。また、学生には高い付加価値を身に付けて卒業させる必要があり、そのためには厳格な成績評価を実施する。例えばGPA（グレート・ポイント・アベレージ）制度を活用する等の取り組みも参考とすべきである。更に学外で取得した資格に対しては単位を認めるなどを積極的に進めるべきである。また、学生による授業評価を取り入れ学生の視点に立った授業内容の改善に努力することは、学生自身の勉学意欲の高まりと勉強する習慣が身に付くこととなり、「山口大学の学生はよく勉強する。」との評価にも繋がるものと考えられる。

III. 就職指導・支援の在り方について

1. 学生への就職支援のため、充実した全学的な組織を設置すべきである。例えば、学内外に対し、積極的な就職指導・支援活動ができる就職指導対策室（仮称）などを設置することが望まれる。
2. 学生への職業観の育成のため、キャリア教育並びに企業と連携・協力したインターンシップを更に拡大すべきである。

（概要説明）

近年の厳しい経済状況の中では山口大学においても学生の就職は容易でない状態となり、学生にとっても重大な関心事である。こうした中において山口大学は、近年の傾向であるベンチャービジネス志向に対する取り組み並びに通年採用・中途採用への情報収集と提供に関しては優位な対応が行われているが、就職の大半を占める企業への「学生の売り込み」に関しては、私立大学に比して全学的な就職指導・支援体制が不足している。出口の重要性を考えれば、本腰を入れて就職支援に取り組む組織を設置する必要性が問われる。

例えば、学内外に対し、積極的な就職指導・支援活動ができる就職指導対策室（仮称）などを設置し、教官及び事務官が積極的に企業訪問などを行い緊密な連携によって、「学生を企業に売り込む」姿勢と取り組みが望まれる。

また、現在の学生は、身近に働く人の様子に触れることが少ないため、職業観、勤労観の未成熟な者が多いと指摘されている。学生への職業観の育成のためには、学生の職業意識の形成に資する授業科目の充実を図るとともに、企業と密接に連携・協力したキャリア教育やインターンシップの拡大を図ることが重要である。

TOPICS

IV. 学生関係施設の整備・充実

学生の基本的な生活施設及び課外活動施設並びに学習環境の設備を適切に整備充実する必要がある。

(概要説明)

学生関係の施設で学生寮及び食堂などは学生の基礎的な生活施設として、特に学生寮は集団生活により人間とのふれあいによる教育的効果が期待できる場であり、経済的観点のみならず教育的観点をも考慮の上、また、教室などの学習環境の設備は学生が主体的な学習に十分取り組むための学習の場として、更に、大学会館及び課外活動施設などは学生の人間的成长とを促す施設として重要であり、山口大学は順次適切に施設整備の充実を図る必要がある。

V. 国際化への取り組みについて

1. TOEIC（トイック）、英検等の受験を目的とした科目の開設とその試験結果を単位認定する制度の拡大を図る必要がある。
2. 国際化を推進させるため、留学生センターを設置する必要がある。

(概要説明)

大学教育として、国際化にも適切に対応し問題を解決できる能力の育成が求められ、国際的に活躍できるコミュニケーション能力の一層の向上を図るために、TOEIC（トイック）、英検等の受験を目的とした科目の開設や試験結果の単位認定を行う制度の拡大を図るなどの諸施策を講じる必要がある。また、外国人とのふれあいに幅をもたせるために学生に日本人文化を身に付けることの教育指導の方法も検討されたい。

一方、外国人・留学生への対応並びに在学生の留学に関しては全学組織として、例えば留学生センター（仮称）などを設置し、外国人には山口大学の入学案内、大学生活及び就職状況等の情報提供や留学生への日本語教育の充実並びに学部学生・大学院生には長期・短期留学の奨励が重要である。更には多くの留学生を受け入れる環境も早急に整備する必要もある。こうした取り組みを行うことにより、山口大学の国際化が更に進み、学生の国際意識も高まるものと考えられる。

TOPICS



第7回山口大学運営諮問会議議事録

日 時 平成13年12月4日(火) 12時30分～14時20分
 場 所 特別小会議室(事務局2号館2階)
 出席者 松野浩二議長、岩田啓靖副議長、
 河野康志委員、高本政次郎委員、
 中澤晶子委員、中島篤巳委員、中東素男委員、
 福田百合子委員 8名
 欠席者 安藤忠雄委員、牛見正彦委員 2名
 陪席者 村田副学長、吉村副学長、鎌田事務局長
 (事務局) 総務部長、経理部長、学務部長、施設部長、
 総務課長、企画・広報室長、学生生活課長、
 企画係長、企画主任、企画係員

議 事

1. 諮問事項「学生生活の充実について」の（提言）（案）について

議長から、このことについて諮られ、各委員から、提言を行うに当たり次の補足意見が述べられ、補足意見は議事録に明記することとした後、「学生生活の充実について」の（提言）（案）が承認された。
 なお、提言は会議終了前に議長から廣中学長に提出された。

(各委員からの補足意見)

- ア. 学生が学外施設を利用し易くするために、大学が割引等の利便の交渉を行ってもらいたい。
- イ. 学士入学及び社会人入学の枠を広げてもらいたい。また編入学が容易にできるように努力してもらいたい。
- ウ. 学生を甘やかし大事にし過ぎてはいけない。バランスが必要だ。
- エ. 学生は地域と大学との学外交流を通じて学ぶことも必要。また他大学と共同研究・単位互換で交流の推進を図る視点も必要である。
- オ. 入学後に外国と交流するイベントを企画する等の課外活動は有意義である。また外国留学のルートと支援の窓口が重要である。
- カ. 出口は厳しい方がよい。1年目に他大学が真似できないような徹底した補習授業を実施してほしい。
- キ. 学生のインターンシップにNPOを活用した研修等を実施してほしい。
- ク. 山口大学は、都会大学と田舎大学との差別化で生かせることを考えられないか。
- ケ. 山口大学が吉田に移転し、学生が旧市内市民と離れ湯田地区中心となった。従って、旧市内に学生の活動範囲を広げる努力をお願いしたい。
- コ. 東アジア研究科の授業を旧市内で開設すること及び市民が参画できる教育施設を山口大学のリードで設置することを考えてほしい。また地域型の施設として、地域も他大学へも開かれた国際留学生会館の設置が望まれる。
- サ. 職業資格的なものを単位互換の中に取り入れてほしい。

2. 自主提言（松野私案）について

議長から、「新しい「国立大学法人」像について（中間報告）」について、説明が求められ、事務局長

T O P I C S

から同中間報告の概要説明があった後、意見交換が行われた。また、自主提言（松野私案）に対する意見も求められ、委員から主に次の内容の発言があった。

なお、自主提言（松野私案）は委員からの意見を参考に議長が取り纏め、次回運営諮問会議に提出することとした。

（委員からの自主提言（松野私案）に対する主な意見）

- ア. 山口大学が準大学院的な感覚で施設を利用でき、また論文も発表できる等のコミュニケーション広場としての機能は考えられないか。
- イ. 中四国地区には薬学部がない。薬学の需要はあるので、その設置は考えられないか。
- ウ. 山口大学のグランドデザインは、個々の学部が努力して作り上げる方が望ましい。
- エ. 山口大学の個性と存在感のために、歴史研究の絞り込んだテーマで明治維新から現代史研究までを国際的な人材を集めて研究する戦略を打ち立てていただきたい。
- オ. 山口県立大学と山口大学が連携し、山口県立大学は山口学を行い、山口大学は中国5県の中国学を行うことが考えられないか。
- カ. 教育立県として教育学部を専門化し、中国5県をカバーする機能に拡大を図ることは考えられないか。
- キ. 事務関係で、スクラップ化を徹底的に行い、新しいことを実務上で最優先に考えていただきたい。
- ク. 山口大学は大きく分けて宇部と山口に力が分散しているので、山口大学は力を結集する方向に持っていく必要がある。

3. その他

次回運営諮問会議は予定どおり14年3月5日(火)とした。

TOPICS

大学開放

大学の日

■ 阿部 弘和 助教授 教育学部大学開放活動運営委員会委員長

『大学の日』の目的と内容

教育学部ではこれまで地域貢献、開かれた大学づくりをめざし、社会人などの受け入れや公開講座等の開催など様々な活動を行ってきました。平成13年度はこれらに加え、教育研究重点化経費から予算を得て、教育学部全体の活動として『大学の日』を実施しました。『大学の日』は市民に様々な学習の機会や知的情報を直接的に提供するとともに、よそ行きでない「普段の大学」を知つてもらう事を目的としたもので、(1) 授業の公開－実験や演習を

含む32の授業を公開しました、(2) 研究室や施設の開放－参加者が自由に参観、(3) 教官とトーカー教官室を訪れ、討論や歓談をしました。そして、この日を記念して(4) 記念講義の4つの行事を行いました。

実施の状況と評価

12月6日(木)9時半～18時に『大学の日』を開催しました。参加者の約半数は山口市からでしたが、広島市～下関市の合計41名が参加されました。量的には問題がありました(年度末、平日、第1回目などの理由も?)、質的には満足すべき点がありました。例えば、この種の行事では参加者の多くが、比較的時間がある高齢者世代が多い傾向がありますが、今回の参加者の75%以上が60才以下(10代から50代までまんべんなく)のいわゆる現役世代でした。また、単に授業を受けるだけでなく、半分以上の方が教官室を訪問されたり、研究施設の見学もされ、積極的な参加が目立ちました。そして、アン



受付は玄関。教官と学生が案内しました。



総合学習で小学生も。一番若い参加者でした。

TOPICS

ケート調査の結果によると、95%の方が次回も参加する、また、大半の方がこのような行事がもっと日常的にあるべきなど、『大学の日』に対して好意的評価を与えてくれました。大学が主催するこの種の行事では、多くの人を集めるために内容がお祭り的であったり一過性である傾向を感じられます。しかし、今回のような地道な行事でも、目的意識がはっきりした参加者がある事が分かり、大学に求められている「社会のニーズ」に応えるとはどんな事かを考えるよい機会となつたと確信しています。

これからの課題

我々は、大学は常に社会に開かれている、何時でも誰でも受け入れると思っていますが、外部の人々

は敷居が高く、行きにくい場所との意見が多数ありました。確かに、環境整備という点からみても、大学の建物は迷路のようで、しかも、異常なほど案内板等がありません。このようなすぐに解決できる課題も含め、この行事は我々にとっても、研究・教育活動の内容を考え充実させるよい機会がありました。最後に、この行事の実施にあたって附属図書館からご支援をいただきました。この場を借りて、お礼申しあげます。

TEL/FAX 089-933-5352

E-mail : abe@edu.yamaguchi-u.ac.jp



参加者はどの人？学生と一緒に受講しました。



先生1、学生1の演習にも。しっかり勉強しました。

市民も気軽に受講して

山大教育学部「大学の日」

山口教育学部（山口）の授業をやってもらいたい「大学の日」が開かれた。市吉田は大江、西郷の駅前で開催された。JR山口駅前にて、山口教育学部の講師による「市民をはじめとする皆様が、山口の教育をよりよくしてもらいたい」という思いで、市民の講義や、教員の講義などを実施した。山口教育学部は、この日、小学生の算数や、高齢者の算数などの授業を行った。また、教員の講義では、山口の歴史や、山口の文化についての講義など、学年別に分けて行われた。また、教員の講義では、山口の歴史や、山口の文化についての講義など、学年別に分けて行われた。

山口新聞 平成13年12月7日掲載

TOPICS

シンポジウム



第3回国際シンポジウム 「遺伝看護学」

■ 塚原 正人 山口大学医学部保健学科

医学部保健学科主催の第3回国際シンポジウムが学長裁量経費の一部補助を受け11月16日医学部「霜仁会館」で開催されました。保健学科国際シンポジウムは、保健学科の国際化を目的に、わが国初の看護医療系国際誌「Nursing and Health Sciences」が創刊された1999年に企画され、第1回は「老人看護学」をテーマに開催されました。3回目の今回は「遺伝看護学」をテーマに国内外から40名の研究者が参加して行われました。

2001年2月のヒトゲノム解析の終了は遺伝学分野のひとつのエポックでした。

これを契機に、ポストゲノム時代に突入し、さまざまな遺伝子情報が明らかにされる中で、それをどう臨床現場に生かしていくかが今後の大きな課題となっています。遺伝子診断・治療分野の急速な進歩が予想される中で、受益者たるクライアントに対するサービスやケアがますます重要となっていきつつあります。とくに看護職はチーム医療の一員としてクライアントにきめ細やかな配慮をしなければなりません。このような状況の中で、本シンポジウムでは今後わが国における看護が遺伝医療にどう関わるか、また果たす役割は何かを考える目的で開催されました。

遺伝医療分野の先進国である米国から著名な研究者3名、John C. Carey教授(University of Utah), Suzanne B. Cassidy教授(University of California, Irvine), Felissa R. Lashley教授(Southern Illinois University)が基調および特別講演を行いました。またSouthern Illinois University小児看護学教授Wendy Nehring教授が参加されました。残念なことに、米国のヒューストン大学のFrazier博士が悲惨なテロ事件

の余波のため、来日を断念されましたが、他の先生方には快く来日していただき、主催者としては本当に助かりました。

わが国からは本学を含む17大学、3病院、1施設から計28名の方々が参加され、4題の発表がありました。

当日は廣中平祐学長のご挨拶の後、まずCassidy教授が「Prader-Willi症候群患児ケアにおけるナースの役割」について、次いでCarey教授が「18トリソミーおよび13トリソミー症候群患児を取り巻く医学的、倫理学的問題」について興味深い講演をされました。午後のセッションでは北海道医療大学の篠木絵里先生が「遺伝性疾患に対する遺伝子検査に関する看護学生の意識調査」について、本学科の飯野英親先生が「わが国の高等看護教育における遺伝教育の現状」について、東海大学の溝口満子先生が「わが国における遺伝看護の現在と未来」について、岩手県立大学の安藤広子先生が「地域の特性に応じた遺伝看護実践の現状と問題点」についてお話をされました。最後に、遺伝看護学の草分け的存在であるLashley教授が「The Post-human Genome Era : How Nursing and Health Care will be Affected」のタイトルで今後の遺伝看護学のあり方について内容の深い、示唆に富むお話をされました。セッション最後の総合討論では、参加者全員が円卓を囲み、英語・日本語を交えて自由に感想や意見交換を行い、これからの遺伝医療の中でなすべきこと、協力できる研究テーマなどについてホットな議論がなされました。シンポジウム終了後のレセプションでも和気あいあいの雰囲気の中で、参加者同士で交流を深めることができました。

TOPICS

国際交流

2001年日本留学フェア
(タイ)に参加して

■宮本 文子 専門職員 学務部入試課



留学フェアの趣旨

10月27日(土)、28日(日)の2日間、バンコクにおいて開催された「2001年日本留学フェア(タイ)」に、農学部鈴木達行教授及び総務部国際主幹留学生係林浩之係員とともに参加しました。タイにおける「留学フェア」は、財団法人日本国際教育協会及びタイ国元日本留学生協会(OJSAT: Old Japan Students' Association, Thailand)主催、在タイ日本国大使館後援で毎年開催されており、今年は10回目にあたります。本学としては、今回初めての参加でした。

この「留学フェア」は、タイの学生が日本留学を志し、留学希望に合った大学を選択し、実りある留学を達成できるようにするために、日本国内の大学が直接、現地へ出向いて、個々の大学教育、研究上の特色等に関する情報を提供し、留学の促進を図る目的で開催されるものです。今回は、国立20大学、公立1大学、私立18大学の合計39大学から参加がありました。

タイから我が国への留学生は、1990年の850人から、2001年は1,411人になっており、この間に約1.7倍に増加しています。これは、我が国における受入留学生(78,812人、2001年現在)の約2%にあたりますが、国別では5番目に多く受け入れています。本学におけるタイからの留学生は、9人(2001.10.1現在)で、全留学生222人の約4%にあたります。



TOPICS



バンコクでの留学フェア

バンコクでの「留学フェア」は、全体で2,305名の留学希望者及び進学指導者等の参加がありました。山口大学ブースへの来訪者は、初日は74名、2日目は93名の合計167名でした。本学ブースへの来訪者の多くは、“外国人対象の初級からの日本語コース”課程があるかどうかと大学院進学について、特に関心が高いと見受けられました。学部への留学は、日本語能力試験（学部によって、1級、1級または2級）の受験を必要としているために、ハードルが高いと感じているようでした。説明に当たって、英文並記の大学院の募集要項は、たいへん有効であったと思います。また、事務的なことではありますが、ブースの掲示物として、英語による本学の学部、研究科等の一覧、タイ語による本学が国立大学である旨の表示及び本学（山口県）が日本のどこに位置するかを示す地図等があれば、より効果的であったかと思います。

なお、カセサート大学など5大学と大学間学術交流協定締結のため、ちょうどタイ訪問中の廣中学長、他の先生方が、初日の午前中に会場に来られまして激励を受けました。



感想など

バンコクの10月の最高気温は35度、最低気温は27度、湿度70%で雨期の終わりにあたり、また、1日に何回かスコールがあつて、非常に蒸し暑く感じました。タイでは、11月から4月までが乾期で、特に11月から2月ぐらいまでが比較的過ごしやすいとのことです。タイ料理については、実はとても楽しみにしていました。香辛料が強くて辛いと聞いておりましたが、思ったよりも辛くなく、とても美味でした。もっとも、外国人向けに多少“毒氣”を抜いたものだったのかも知れませんが、トムヤンクンのプリプリしたエビと香草の香り、スープの美味しさ等ちょっと忘れない味です。会場のコンベンションセンターと宿舎のホテルとは建物でつながっているので便利でしたが、街の様子などは飛行場往復のバスの中から見る程度で、日程的にゆとりがないのが少し残念でした。

学内連絡先 内線5049

E-mail : GA125@office.po.cc.yamaguchi-u.ac.jp



私の研究

すべての生物がもつ 生体防御のしくみ



中井 彰
教授
大学院医学研究科
生体シグナル解析医学講座

熱ショック応答は生体の恒常性を守るしくみ

原始の生命が約65億年前に誕生してから、生物は絶えず温度の変化に適応しようとしてきたと考えられます。その結果、極寒の凍土の中を好む生物もいれば、100度を超える火山を好む生物も出現してきました。生物の構成成分のうち、DNAは遺伝情報を担うものですが、蛋白質はその情報を実行するための最も重要な成分です。この蛋白質は、温度変化によって細胞の機能障害を生じるのは、この蛋白質が変性するからであるといつても良いでしょう。細胞には、蛋白質が正しく機能することや、多少の温度変化や有害物質によっても変性しないようにする大切な機構があります。この機能は熱ショック蛋白質と呼ばれる一群の蛋白質によって担われているのです。熱ショック蛋白質は、通常の細胞でも存在していますが、その名の通り細胞が高い温度にさらされると誘導をうけます。この応答を熱ショック応答と呼びます。この応答は、蛋白質の異常

を感じし、遺伝子発現のシステムへ伝える経路から成り立ちます。この熱ショック応答の分子レベルでのしくみを探ることが私の研究室のテーマの一つです。

未知のはたらきによって個体発生に一役になう

熱ショック応答の鍵となるのが熱ショック転写因子とよばれる遺伝子の発現を促す因子です。この転写因子は、熱ショック応答だけでなく個体の発生においても必須の役割を担うことがわかつきました。卵や精子の成熟過程、胎盤形成過程、脳の形成過程などがそうです。このような研究は、細胞の研究では不可能で、個体の研究を行う必要があります。私たちはマウスを用いて特定の遺伝子を壊したり遺伝子を導入したりすることによって、どのような影響があるかを調べています。このような研究から、熱ショック応答が生物進化の過程でどのような機能分化を行っていったかがわかると考えられます。

種の保存や分子進化にかかわる

種の保存にとっては、いつも細胞を障害による死から守ることが有利なわけではありません。例えば、細胞集団に紫外線が当たった場合、わずかなDNAの傷害であれば修復できますが、修復できないほどの障害が生じれば、その細胞は娘細胞に遺伝情報を伝えることなく死ぬ方が、集団全体としては有利です。同じことが蛋白質の傷害でもいえるのではないかということが私たちの研究からわかつきました。精巣は温度上昇に過敏で、睾丸を高温で維持すると不妊になることは良く知られています。精子形成細胞では高い温度にさらされると熱ショック転写因子が積極的に細胞死を導くことがわかりました。このような機構は、種の保

存にとっては好都合だと考えられます。

蛋白質の構造異常による病気を治す

熱ショック蛋白質は蛋白質の構造形成や構造転換に重要な働きをするわけですが、この性質を用いて病気の治療に使えないかと考えています。構造異常によって起こる病気には、狂牛病やヤコブ病、また遺伝的変異によって蛋白質が凝集してしまう一群の病気があります。このような病気に対して、熱ショック蛋白質を過剰に発現させたり、働きを抑えることで実験的に良い結果がでてきています。熱ショック応答の研究から、このような病気に対して良い治療法が確立することを願っています。

☎ (0836)22-2214

E-mail : anakai@
yamaguchi-u.ac.jp
Home Page :
<http://www.sv.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~seika2/>

私の研究

『悲劇』とは何か



坂本 貴志
講師
人文学部
ドイツ文学

悲劇研究が、現在の僕の主たる仕事である。だから、この研究紹介というものは、ひとつの悲劇論を書くということになるだろう。

『悲劇の死』

悲劇という言葉自体は日常的によくお目にかかる。悲しい出来事や事件、スポーツの場面に遭遇して、人間の挫折と破滅を、手軽に、同情を込めて言い表すのに好都合である。そこにはまた、もはや人間の世界から手を引いた神への、ささやかな告発さえ含まれる。悲劇という演劇の形式、あるいは効果をねらった文学が絶えて久しい一方で、現実の事態は、この言葉がもたらす効果になおすがりついている。

『悲劇の誕生』

もともと、悲劇という演劇の名称は、二千五百年以上前の昔、古代ギリシアの時代にまでさかのぼれば、「山羊のうた」という、のんびりした意味合いしか持たなかった。破滅する人間達を描いたドラマは、視点

を変えれば、悲しいと見られる必要はなかったのかも知れない。古代ギリシアの「演劇」が、神々に人間を犠牲として捧げて、世界の秩序が守られるのを確認するお祭りだったとすれば、芝居の中の人間達の苦悩も、深ければ深いだけ、秩序の堅固さの証（あかし）立てとなり、世界はいよいよ信頼を寄せるべきものとなっただろう。山羊を犠牲に捧げる起源を持ったはずのギリシア演劇は、宗教的祭事として、苦悩を救済のヴェールで包んだとも考えられる。そうしたカタルシスのある芝居を、悲しいととらえる必然はないのかもしれない。

『悲劇の再生』

だがそれにも関わらず、ルネサンスと近代を迎えて、悲劇は、人間の破滅と苦悩に焦点を合わせて、神と神々の超越的な視点を構造上不可避免的に欠いたまま、なお求められた。現在のわれわれの思考、文化的背景を準備したこれらの時代は、

ユートピアを描き、技術の発展と未来とに対する信仰を寄せる一方で、同時に悲劇芸術の多産期であった。この一つの典型を十八世紀末から十九世紀初頭のドイツにみる。悲劇作品が多く書かれ、熱狂的に受け入れられた時代である。それは何を意味するのだろうか。

近代悲劇は、ユートピアへと進歩する世界にあって、弁証法的な否定の契機として働くとする考えがある。近代悲劇の描く人間の苦悩は、いまだ未完成の社会の、乗り越えられるべき悲惨を映し出しているのだ、と。そうだとすれば、悲劇芸術は車輪となって世界をユートピアへ運んでゆき、いずれ無用のものとなる。また一方で、神、あるいは神々という超越性を同時代的に取り込むことができない近代悲劇は、超越性自体をネガティヴに志向するものとして構想されている、とも理解される。しかし、その超越性は、結局は特定のイデオロギーを透かしてみせることになり、それは地的な権力に取って代わられる危険を併せ持



シチリア島タオルミーナの古代ギリシア劇場遺跡
たとえば、空の碧、海の蒼、そしてエトナ山の白い噴煙を仰ぎつつ、これら神々の臨席のもと、春の陽光を浴びて、人間のドラマは演ぜられた。

つ。そのような悲劇理解は、崇高美がファシズムと結びつくのを防ぐことができない。現実の事態を「悲劇」と呼ぶことの危険は、このことを背景としている。

『悲劇性とは何か』

近代悲劇が人間の破壊を描くとき、それを鑑賞する人間は、強烈な経験としてのエクスタシーに近いものを見る。それが、何らかの超越性の表示、あるいは、ユートピアへと向けたカタルシス的健康確認へと

回収される以外の可能性を持ちはしないか。近代という未完のプロジェクトが立ち上がる際、同時に生まれた近代悲劇は、この立ち上がらない残余の部分を思考してはいなかつたか。それは、われわれの生の可能性を豊かにするものを持ちはしないか。

われわれの現代では、悲劇という演劇の形式はすでにだいぶ前に死に絶えている。悲劇は断片として、ただ悲劇性として、強度を持った体験を代弁しうるだけである。しかし、現実の事件が、その名前を持ちなが

ら「悲劇」とはほど遠く、反復されつつ、支配的イデオロギーへの諦念的追従を強要するのであれば、悲劇性の持つエクスターの無重力は、逆に、われわれが落下する先にある共同体に、別の可能性を開かないだろうか。

啓蒙主義期ドイツの近代悲劇を対象としつつ、僕は、「悲劇」とは何か、を探求している。

E-mail :

ts@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp

受賞報告

工学部 森田昌行 教授 県科学技術 振興奨励賞を受賞



本学工学部の森田昌行教授が平成13年11月12日、県科学技術振興奨励賞を受賞されました。

森田教授は、電池や電気分解など電気化学過程を利用したデバイスやプロセスの開発に関する研究を行っておられます。受賞対象者は「高性能電池開発のための新規材料の設計と評価に関する研究」で、携帯電話やノート型パソコンなどのモバイル機器に使う電池の高性能化に貢献されています。

受賞おめでとうございます。

山大工学部の森田教授 県科学技術振興奨励賞

携帯電話の電池開発に貢献

今年の県科学技術振興奨励賞を受賞したのは「高性能電池開発のための新規材料の設計と評価に関する研究」で、山大工学部の森田昌行教授だ。森田教授は、電池や電気分解など電気化学過程を利用したデバイスやプロセスの開発に関する研究で、特に携帯電話やノート型パソコンなどのモバイル機器に使われる電池の高性能化に成功した。これにより、携帯電話やノート型パソコンなどのモバイル機器の性能が向上した。この研究は環境問題など研究の中でも、大きな意義がある。また、電池開発による環境問題の解決に貢献した。また、電池開発による環境問題の解決に貢 contributon by Yamaguchi University

朝日新聞 平成13年11月13日掲載

私の授業

小学校教師を目指す人 を対象とした『教科教 育法図画工作』の授業



吉田 貴富
助教授
教育学部 美術教育

1. 私の授業形式

私は教育学部に所属して、学会論文発表と絵画作品発表を行ないながら、大学院と学部の授業を担当しています。学部の授業としては、共通教育科目・教科専門科目・教職専門科目等を担当していますが、ここでは、受講者数が最も多い『教科教育法図画工作』の授業について述べてみます。

この授業は、小学校教員を目指す人を対象として、初等教育における美術教育に関して、その目的・内容・方法・制度等について理解をはかるものです。今年度の受講者数は約160名。教室は、視聴覚機器が充実している教育学部附属教育実践総合センターの2階を使用していますが、受講生が多いため2クラスに分けて同じ内容の授業を行なっています。

誤解を恐れずに述べるなら、今日のような大衆教育社会においては、高等教育といえども、授業の内容は

ともかく、授業の基本的な形式は中学校や高等学校あるいは予備校のものと大差のないものでよい、いえ、むしろ大差があってはまずいのではないかと私は考えています。学生はエリートではない。甘やかす理由は何もない。(エリートなら甘やかしてよい、と考えているわけではありません。歴史的事実として、かつて大学生はごく少数のエリートとして日本社会において寛容な扱いを受けていました。が、今は違いますね。)一定の管理も当然必要です。少人数教育ならば、いわゆる大学らしい授業形式も可能ですが、マスプロ授業においては基本的に無理でしょう。かと言って、旧来の大学特有の「遅刻・居眠り・おしゃべり可」のマスプロ講義では、受講者や納税者の理解や支持を得ることは難しいでしょう。

私の授業は、大学のタイムテーブルよりも10分遅れて開始することにしています。その代わり、遅刻は一切認めません。ちなみに山口大学の休憩時間は短すぎると思います。休憩と移動・準備に10分では、学生も教官も大忙しえじょう。無理なタイムテーブルで遅刻が常態化するよりは、休憩と移動に十分な時間を与えて学生も教官も授業開始時刻を守る方がいいと考え、この形式を自分がいいと考え、この形式を自分の

授業だけでゲリラ的に実行しているところです。同志を増やそうとは思っていませんが、タイムテーブルの改定に関しては一考の余地があると思います。

幸い私の授業では、飴ガム・私語・居眠り・携帯呼び出し音などは、ほとんどありません。

2. 学校教育に関する俗論

(1) 俗論その1：『教科教育法』の授業では指導方法・指導技術ばかり教えている

「教員養成系大学・学部では、指導方法・指導技術ばかり教えている」とは、大学に勤めている某美術史家が書いたエッセーに出てくる台詞であり誤った認識ですが、同様の認識は一般の人々にも根強いと思われます。また、「教科教育法」という授業も、その名称からか、しばしば誤解を受けています。実態は、指導方法や指導技術ばかりを教えているわけではありません。いえ、厳密に言えば、教科によって多少事情が異なるようです。国語・社会・数学・理科など、受講生が高校まで学び続けた教科に関しては、教科教育法の授業がいきなり教材研究から入ることも珍しくないようです。しかし、美術教育に関しては、受講生自



らが受けてきた美術教育を思い起こさせながら、「なぜ」「何のために」普通教育の中で美術（図工）を学ぶのかという理念・目的からていねいに掘り下げていく必要があります。この過程で、美術なんて「暇な人の趣味」「一部の才能のある人たちの活動」などと考えている受講生の価値観に搖さ振りをかけなければなりません。（ちなみに、最近話題になっている本『芸術立国論』集英社新書において平田オリザは「芸術には公共性がある」と述べています。読んでみてください。）さらに、それ以前の問題として、教師を目指す学生の中にも根強い、次のような俗論を解体しておかなければいけないのです。

(2) 俗論その2：「教員採用は人物重視で行なうべき」

教育学者佐藤学は、「教員採用は人物重視で行なうべき」という考え方方は俗論である、と喝破します。教師が「いい人」であることに甘んじて専門的力量を高める努力を怠りがちである傾向にあることを、国語教育のオーソリティー大村はまは30年も前に指摘しています。私も両氏と同じスタンスです。人物の良し悪しを決めることは難しいけれども、授業の巧拙は、授業スタイルのバリエーションを最大限に認めた上で、即座に判明します。

ところが「教員採用は、人物重視と専門性重視のいずれで行なうべきだと考えますか？」と受講生に投げかけると、圧倒的多数、9割ほどの学生が「人物重視」の方に手を挙げます。驚くべき実態です。彼らは、教職に求められる専門性を軽視していると同時に、「自分はいい人間なので教員として採用して下さい」と言っているようなものです。

学校教育については誰でも語ることができます。みんなで教育について語ること自体は、むしろ歓迎されるべきことでしょうが、それはしば

しば学校バッシングや教師バッシングといった形で表われます。「教師なんて誰だって（私だって）できるだろうに、一体どうなってるの！」と考えている人は少なくないようです。しかし、誰もが教師として的確で充分な指導ができるでしょうか。「でもしか教員」で勤まるほど、現代の学校教育を取り巻く環境は甘くはありません。教師には幅広い教養と高い専門性が求められています。「教育は難しい（から、おもしろい！）」という謙虚な認識が必要だと思うのです。

教育と医療を比較して共通点と差異点を考えてみると興味深いです。教師も医者も「先生」と呼ばれますね。ここでは紙幅に限りがあるので、これ以外の共通点と差異点についてはみなさんなりに考えていただければいいのですが、私の立場を鮮明にするために次の一点だけは記しておこうと思います。

教員養成（教師教育）については様々な考え方があるようですが、教師も医師と同様に、「専門の機関（大学・学部）」において、「専門の教官集団」の下に、「専門のカリキュラムと授業」を通して、「同じ専門性を追究する仲間」とともに学ぶ中でこそ、今日的な要求に応えうる高い専門性を具えた人材の育成が可能である、というのが私の考え方です。教員免許状の開放制の下では優れた教師が養成できない、とまでは言いませんが、もしも開放制で充分であると言うならば、優れた医師の養成も開放制のもとにいわば単位のつまみ食いによって可能であると言わなければならないと思えるのですがいかがでしょうか。

(3) 俗論その3：「教科教育は専科の教師が行なえばよい」

佐藤学は、教師の教養レベルの低下を指摘しています。私の授業においても、小学校教師を目指す学生の中に、「自分の苦手な教科は専科に

任せたい」と考えている者が多いことに驚かされます。文部省は今後、小学校における専科枠を拡大することを試みるようです。しかし、子どもたちをいわば「丸ごと理解」する必要のある発達段階、即ち小学校の低学年から中学年にかけては、基本はあくまでも全科担当であるべきでしょう。制度の問題はともかく、小学生に図工を教えられるくらいの美術に関する基礎的素養のない大人が小学校の教壇に立つことに問題があると思います。

3. 『教科教育法図画工作』の授業

上記のような問題意識に立って、私のこの授業では教科専門的な内容ではありますが美術史の基礎を3回ほど授業を費やして取り上げます。教科教育の指導力を支える主なものは、その教科の基盤・背景となる学問・文化領域に関する素養だからです。図画工作科を指導するには美術に関する素養が不可欠ですが、従来の教員養成の中では、不思議とこの点が必ずしも強調されていません）。もっと直接的には、人類の美術史における表現様式の変遷に関する理解がなければ、児童画の理解も、造形遊びを含めた現代の図画工作科の教科内容の理解も不可能だと考えるからです。

マスプロ授業とはいえ、できるだけ学生が主体的に授業に臨めるよう、先述の俗論をテーマにディスカッション（時にディベート）をしてみたり、出席カードに記述された受講生の質問や意見を次の回の授業で取り上げたりして、できるだけインタラクティブな授業を心がけています。

あつ、紙幅が尽きました。詳しいお話しは、またの機会に…。

読者の声

オクラホマ大学 学部留学体験記

油利 圭子
人文学部言語文化論学科
英米語文化論コース 3年

昨年の八月より約一年間、人文学部からの交換留学生としてアメリカ合衆国のオクラホマ大学へ派遣して頂きました。幼少の頃からの夢が叶い、憧れや希望、一抹の不安と勇気を胸にアメリカへと旅立ちました。アメリカは想像以上に様々な意味で大きな国でした。際限無く続く広大な国土、移民国家である精神気質が培った豊かで大らかな人々、様々な文化を享受する包容力を大変心地よく感じる場所でした。

アメリカの大学は、病院や警察をはじめ、各種学術・文化・スポーツ・娯楽施設を広大な敷地内に有し、学



誕生日会

術の最高機関としての存在を名実ともに体現していました。私はあまりの規模に戸惑いつつも大変な感動を覚え、この素晴らしい環境の中で異邦人の私が、ある日突如として一般のアメリカ人学生と対等に肩を並べて授業を受けるという生活が始まりま

した。日本の講義形式中心の教授に慣れ親しんできた私を待っていたのは、ジュースを手に教台に座って授業をする教授とジュースやお菓子を手に授業に臨む生徒でした。生徒の応答や意見を軸に繰り広げるよりカジュアルな双方向性の色の強い授業



日曜学校

形態で、初めは発言を苦痛に感じた授業も、2ヶ月もすると積極的に参加するまでに成長しました。また、膨大な量の予復習や宿題をこなすことで、学習意欲が向上し、それと一緒に大きな自信を付けることができました。また、実際に英語使用環境に身を置き、国際言語としてではなく、第二言語として同化に努めながらの学習を通じ、より母語話者に近い形での英語を習得できたのではないかと自負しています。

日常生活や旅行を通じて、書物やメディアからの情報としてのアメリカ文化を肌で感じることが出来ました。アメリカはやはり、多民族国家としての多様性に溢れた国であり、様々な民族の宗教・慣習・思想観が織り成してアメリカという合衆国を、文化を築いているのです。また、私自身が部外者という異質の存在として扱われるという経験をすることで、日本人としての自我意識に目覚めるとともに、自分という存在を客観的

に見ることで新たな自我を覚醒しました。教会の日曜学校で日本の文化をボランティアで教えるといった活動や中学校の国際理解教育に参加するという貴重な経験を通して日米双方の文化・言語教育についての見解を深めることができ、将来生かすことが出来ればと思っています。そして、アメリカの精神風土や歴史観、価値観を肌で感じることで、現在学習している文学の研究において、私なりの視点・着眼点を持てた事が大きな成果だと思います。

留学生活において最大の収穫は親友でありルームメイトである二人のアメリカ人学生との出会いです。彼女達とは民族や慣習が違うにも拘らず同様な価値観や思想を持ち、彼女たちとの生活が私のアメリカでの時間の大半を占めました。家族のように愛し合い多くを共有し、彼女達から英語やアメリカ文化は勿論の事、



ルームメイトとともに

博愛精神や人生観までありとあらゆる事を学びました。沢山の素晴らしい出会いに恵まれたこと、そして、心ある方々の優しさや友情に支えられたからこそ、私の留学は成功を収めることができました。

言葉の壁や環境の変化などを乗り越え、多くの経験し、素晴らしい出会いに恵まれ、多くの学ぶことで私自身、強く、優しく、そして、逞しくなれたような気がします。留学を笑顔で誇れる自分を幸せに思います。アメリカ留学は私にとってかけがえのない財産です。このようなすばらしい機会を与えて頂き、有り難うございました。

教官著作書の紹介



位相幾何入門（裳華房、2001年10月）

標題の通り本書は数学の一分科である位相幾何（トポロジーとも呼ばれる）の入門書です。位相幾何では \triangle (三角形) も \square (四角形) も \circ (円) も区別しません。これらはすべて同じものと考えるのが位相幾何の立場です。したがって位相幾何は非常に粗っぽい幾何です。しかしこのような立場に立っても、閉曲面と呼ばれる2次元の図形は無限に多く存在します。

現代の幾何が扱う図形は一般には高次元の図形です。これらは目には見えません。理論上観念的に存在する図形です。本書は入門書ですから、無味乾燥な理論の解説になることを避け、なるべく低い次元に具体例を求め、図を多用しました。本書に挿入された80枚近くの図は大学院生の山下雅人君が、コンピュータによってその原図を作ってくれました。出版社の編集部の人たちも驚くほどの出来栄えでした。数学を専攻していない人たちも、これらの図をながめていただければ位相幾何の一端を垣間見ることができるでしょう。

小宮 克弘 教授 理学部



半導体デバイス－動作原理に基づいて－（コロナ社）

21世紀に入り1年が過ぎた。先世紀は相対性理論、素粒子論、量子論等に代表されるサイエンス、更に、半導体技術、バイオテクノロジー、高度情報化技術、新エネルギー技術、宇宙開発技術等に代表されるテクノロジーの時代であり、19世紀迄のサイエンスの進歩の速度と比較するとこの事は明白である。特にこれらの技術は今世紀に入っても更に加速して発展し続けている。の中でも特に半導体技術が果たしてきた役割はIT(information technology)社会への推進の起爆剤となり、非常に重要である。新しいデバイスが発明、研究・開発されると社会のインフラストラクチャーをさえも変える事があるが、1940年代後半のバーディーン(Bardeen)、ショックレー(Shockley)等による点接触トランジスタ、それに続く、接合形トランジスタの発明は正にその1例であろう。それ以後、ダマー(Dummer)による集積化の概念、キルビー(J.Kilby)による集積化の特許、等もあり1960年代始めから集積回路(integrated circuit, IC)として現在に至るまで半世紀近くもの間、進化を続いている。本書はこの半導体技術の発展の大きな役割を担ってきた半導体デバイスの動作原理に関して詳しく解説した。量子力学を基礎とした物理、バイポーラ、MOSトランジスタの動作、近年微細加工によりデバイス特性に量子力学的現象を生じる事からトンネル現象を応用したデバイス、更に、集積回路以外でも、ナノデバイスの入口である単電子トランジスタ等、動作原理が21世紀デバイスとして非常に重要なと考えられるものの幾つかを取り上げた。

本書の上記内容は筆者が10数年間に及ぶ企業における半導体デバイスの研究・開発の経験、更に、山口大学での学部講義科目『電子デバイス工学』、『集積回路工学』、大学院前期博士過程講義科目『固体素子工学特論』、後期博士過程講義科目『応用電子物性学特論』の一部を纏めたものである。対象は大学、高専の専門科目を勉強し始めた学生、更には、大学院修士課程、博士過程の学生も対応できる様に纏めた。又、企業の若手・中堅技術者、研究者にも読んで頂ける様配慮した。

松尾 直人 助教授 工学部

「著作書の紹介」を公募します。お問い合わせは卷末担当係までお願いします。



新聞掲載された山大・地域から見た山大

11月

- 零下35度細胞で牛妊娠
山口大の鈴木教授ら凍土想定の保存成功
(中国：1日・山口：3日・毎日：7日)
- 服部山大名誉教授ら瑞三秋の叙勲、県関係82人
(山口：3日)
- 第58回 中国文化賞 (中国：3日・中国：8日)
—現代工芸としての萩焼の発展に尽力—
古賀 將夫 山大教育学部教授
- 月曜インタビュー 個人の教育環境を支援
山口市内を拠点に活動の学生起業家 金子 愛さん
(山口：5日)
- 留学生支援で文科大臣表彰
(毎日：6日・朝日・宇部：7日)
- 起業の実体験を紹介
山口大生が研究成果出版 (中国：6日)
- 山口大の整備充実
政府予算要望 県が15項目発表 (日経：6日)
- 「遠山プラン」国立大学対応
広島大など「賛成」 山口大「ノーコメント」
(中国：7日)
- 山大が17日に国際シンポ「東アジアと日本」
(山口：7日)
- 国立大サバイバル —中国地方に見る—
トップ30 山口大、特許に活路 (中国：8日)
- 職業体験の成果 学生36人が発表 —山大経済学部—
(朝日・山口：8日)
- 出前講義 山口大教授が下関中工高に (山口：9日)
- 進路決定に役立った！?
宇部中央高で“出張講義” (宇部：10日)
- 売買楽しんだ 地域通貨ワピー流通！
山口大でオークション ゲーム大盛況 (毎日：13日)
- 山大工学部の森田教授県科学技術振興奨励賞
携帯電話の電池開発に貢献「今後は環境問題など研究」
(朝日・山口・毎日・読売・西日本：13日、中国：17日)
- 外国人に親子でインタビュー
山大で体験型イベント (山口：14日)
- 公開講座 考古学ってなんだろう？
山口大埋蔵文化財資料館で (サンデー山口：14日)
- 頭痛に対する正しい認識を
山大医学部神経内科 森松 光紀教授 (朝日：15日)
- “宇部方式”で活性化を 山口大まちづくり研究所
29日に設立記念シンポ 5年でシステム構築へ
(宇部：15日)
- 知りたいやまぐち ①交通経済
—山大経済学部 澤 喜司郎教授—
(朝日：16日、23日、12月7日)
- 山大のAO入試合格者定員上回る75人に
(毎日・朝日・山口：16日、毎日：17日)
- 角膜研究の最高峰賞 国内2人目の受賞
山大医学部の西田教授 (山口：20日、中国：22日)
- 創作過程に無限の楽しさ
山口大写真部の作品展に自信作 山ノ内 暁彦さん
(山口：20日)
- 積極的な改革で親しまれる病院に
山口大医学部附属病院長に沖田さん
(宇部時報：21日)
- TOEICを学生に義務化 —山口大—
300点以上で卒業資格 (朝日：22日、中国：23日)
- クローン牛2頭誕生 —山大教授ら成功—
冷凍の死亡胎児皮膚で (山口：25日)

12月

- 特許テーマにセミナー 宇部で5日
中四国九州 18大学に衛生放送 (山口：1日)
- 山口大学時間学研究所学術講演会「時間と『私』」
(山口：4日、西日本：6日)
- 課外教育の充実を —山大運営諮問会議—
単位の認定など提言
(中国・毎日：5日、山口：6日)
- 講義や研究室を市民に1日公開 —山大教育学部—
(朝日：5日)
- 大学生活1日体験 山大で生雲小（阿東）児童20人
(山口：5日)
- 北九州テクノセンター 保有特許を相互紹介
山口大など3TLLOと
(日経：6日・8日、防長：9日)
- 市民も気軽に受講して
山大教育学部「大学の日」 (山口：7日)
- 中国地方 大学は今 —山口大—
知恵で地域振興に貢献 (日経：8日)
- 地域貢献できる専門家養成を 山口大と県弁護士会
15日にシンポ ロースクール構想を発表へ
(中国：8日)
- 半導体産学連携山口大など参加
北九州市で13日推進組織 (日経・中国・山口：11日)
- シリーズ 大学の先生 山口大人文学部
(山口：12日・13日・14日・16日・18日・19日・20日・
21日・22日・23日)
- 25日から災害対策の技術を体験
山口大が中学生募集 (中国：12日)
- 山大の法科大学院04年度開校目指す —15日にシンポ—
経済や東アジアに強い専門家養成へ
(朝日：13日、山口・毎日：14日、山口・朝日：16日)
- きらら博の動物園運営へNPO申請
山口大生ら (毎日：13日)
- 大学の研究成果を企業に橋渡し
山口と北九州の「TLLO」が連携
(朝日・毎日・山口・日経：13日、読売：14日)
- 牛などの受精卵培養します —山口大教授と企業が開発—
安い小さい「人工子宫」 (朝日：13日)
- 医療短大部長に塚原教授を選任 —山口大医学部—
(中国・朝日・山口・読売：14日)
- ティータイム 山大経済学部 名畠 恒教授
東アジアの国際協力 (朝日：14日・21日)
- 教育学部存続県へ要望 —山口大OB13団体—
国立大再編の動き受け (山口・朝日：15日)
- プラズマ材料科学研究センター発足
山大きよう記念講演会 (毎日：15日)
- 被爆体験継承山大生ら協力
「山口県豊浦郡友の会」聞き取り調査 (中国：20日)
- 山口大の整備拡充
山口県「事業が有望に」 (防長：25日、日経：26日)
- 山大の学長選公示 広中学長退任確定 (山口：26日)
- 防災知識実験で楽しく
中学生科学技術体験スタート 山大で気象・気圧学ぶ
(中国：26日)
- 山口大2004年度から6学部
センター試験5教科7科目
(読売・朝日・毎日・山口・中国：27日)
- 国立大の教育系卒業生
教員採用8人に1人 山大30%「冬の時代」続く
(山口：28日)

原稿をお寄せ下さい

広報誌は、学内だけでなく、山口県内の高校以上の教育機関、地方自治体及び主として、中国・四国地区の企業等学外の約500の機関に配布します。

ア. Q & A 欄について

山口大学についての質問をお寄せください。質問は、お名前、所属、職（学生の場合は学年）、年齢を付して文書でお願いします。Q & A 欄に採用させていただくときは、字数などの関係で文章を一部修正させていただくことがありますのでご了承ください。学外からの質問を歓迎します。

イ. 催し物について

公開講座、学会、研究会等の開催計画がありましたら、日時、場所、名称、責任者氏名、所属、電話番号などをお知らせください。

ウ. 「私の授業」「私の研究」「国際交流」「山口大学の将来についての提言」など

「私の授業」「私の研究」では、日頃おやりになっていることを、高校生にもわかるように、やさしく述べていただければと存じます。また、昨今、大学の将来についての関心が高くなっています。そこで、山口大学の将来のあるべき姿について、学内外から原稿をいただければ幸いです。建設的なご意見を期待します。

【執筆要領】

上記ウについて、執筆要領は次のとおりです。

1. 原稿（図、表を含む。）は40字×40行で、できるだけワープロでお願いします。第1行は題名、2行目は氏名、所属部局名、研究室あるいは講座名、職、本文は4行目から始めてください。本文は3～4に区分し、小見出しをつけてください。

読者が連絡や質問をされる場合に便利かと思いますので、お差し支えなければ、原稿の末尾に研究室などの電話番号を括弧書きにしてください。

原稿は次の枠内のような形になります。

ワープロを用いない場合は、400字詰原稿用紙4枚以内で、ワープロの場合の要領に準じてお願いします。

ワープロで原稿を作成された場合、お差し支えなければ原稿と一緒にフロッピーをお貸しいただければ幸甚に存じます。

第1行 題名

第2行 氏名、所属部局名、研究室名、職

第3行 (空白)

第4行 本文始まり

•

•

第40行 本文終わり

(T E L _____)

2. ご自分が写っている写真を一枚と本文に関連する写真も添付してください。研究や授業の場面の写真を歓迎します。

原稿には締切期限を設けません。適宜、下記までお送りください。そのほか、種々の問い合わせも下記まで。また、原稿はE-mailで送っていただきても結構です。

〒753-8511

山口市吉田1677-1

山口大学総務部企画・広報室

広報・調査係長 有吉義和

☎083-933-5007 FAX 083-933-5013

E-mail : yuinfo@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp

編集後記

景気の冷え込みに伴い就職状況も一段と厳しさ増しております。就職が大学生活の総決算とまでは言わないにしても、学生個々にとって大学にとっても重要な課題であることは確かです。本特集号「2002年山口大学就職戦線－就職氷河期を生き抜く－」は、学生のみなさんが就職活動を行うに当たって何らかの示唆を得られ、元気づけられることを目指して企画しました。

本特集号では2つの新企画を盛り込みました。1つは各界の最前線でご活躍の方々の雇用者としての立場から就職者への期待を込めたメッセージをいただきました。他の1つは、日常的に学生の就職活動を親身に支援されているキャリアデザイン専門委員および就職担当の先生方の座談会を行い、示唆に富むお話を記事にしました。この特集号が進路を考える上で活用されれば幸いです。

(東 玲子)

◎山口大学ホームページ http://www.yamaguchi-u.ac.jp/index_j.html

山口大学広報第五十九号

平成十四年一月二十一日発行

編集発行 山口大学広報委員会

(総務部企画・広報室)

住所：山口市大字吉田一六七七一一
電話：(083) 933-5007
FAX：(083) 933-5013
E-mail : yuinfo@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp
印刷：児玉印刷株式会社

広報活動専門委員会委員

専門委員	小谷 典子 (委員長 人文学部)	坪郷 英彦 (人文学部)	福田 隆眞 (教育学部)	マルク・レール (経済学部)
小林 熊谷 堀江	森田 東 小宮 克弘 (理学部)	宇佐見晃一 玲子 (医学部)	善甫 宣哉 昌行 (工学部)	森田 昌行 (農学部)
邦和 武洋 穆				宇佐見晃一 (附属病院)
(工学部)				
(教育学部)				(アドミッションセンター)